

《論 説》

パウサニアスのギリシア観

— ローカルな次元からの再解釈 —

大 野 普 希

【要旨】

パウサニアスの『ギリシア案内記』は、「ギリシアに関するあらゆるもの」の叙述を目指した、その射程においても密度においても、他に類を見ない労作である。ギリシアを主題としたこの作品を理解する上で、パウサニアスのギリシア観が枢要の位置を占めることは自明であり、当然その解明を巡っては、これまで多くの研究が為されてきた。

しかしながら、従来の議論が彼のギリシア観の一側面にしか焦点を当ててこなかったことは、あまり認識されていない。すなわちそれらの研究が注目してきたのは、ペルシアやマケドニア、そして何よりも、ローマという他者に対峙する存在としてのギリシアであって、そこにはギリシア内の個々の都市や地域といったローカルな枠組みとの関連で、ギリシア観の問題を検討する視座が欠けていた。

そこで本稿はこのようなローカルな次元からの再検討によって、パウサニアスのギリシア観の新たな側面に光を当てるとともに、それを通して、ローマとギリシア、支配と被支配の二分法を前提とすることなしに、パウサニアスを同時代の文化の中に再 positioning する糸口を提示する。

はじめに

ローマ帝国の最盛期に書かれた、パウサニアスの『ギリシア案内記』（以下『案内記』¹⁾）は、ギリシア本土の遺跡や神話・歴史を比類ない規模と密度で描いた、全10巻から成る大著である²⁾。第1巻でアッティカ地方を叙述し、その後ペロポネソス半島を時計回りに周回し、そこから北上して、最後の第10巻でボキス地方を描く。属州アカイアの範囲と重なる程のかくも広大な領域を扱っていること自体³⁾、他に類を見ない試みだが⁴⁾、その中で繰り上げられる個々の都市や遺跡に関する丹念な記述は、多年に及ぶ超人的な調査・研究なしには凡そ考えることのできないものである⁵⁾。

このように多彩で豊富な内容を持つことから、ギリシアの過去を探求する者にとって、その名に違わぬ導きの書となっている『案内記』ではあるが⁶⁾、かえってその多彩さが、作品としての統一的理解を妨げてきたことも否めない。加うるに、この著作には献辞や叙述目的を述べるはずの序文に相当する部分がなく、その冒頭は唐突に旅の途中の描写から始まっている⁷⁾。作品全体を通して、自己の思想信条については多くを語らないのが、パウサニア

スの流儀である。そのため『案内記』の主題や執筆の目的は、作品の構造や叙述対象の選択などから間接的に推測するしかなくなる⁸⁾。

とはいえ、直接的な証拠が皆無というわけではない。第1巻の中程まで来たところで、「ギリシアに関するあらゆるもの (πάντα τὰ Ἑλληνικά) を同等に」叙述しなければならないとして、パウサニアスは自らの脱線を戒めている⁹⁾。したがって、「ギリシアに関するあらゆるもの」が『案内記』の主題なのである。けれども、これだけでは余りにも漠然としている。「あらゆるもの」とは言っても、広範な領域を叙述するためには選択的にならざるを得ないことは、パウサニアス自身も重々承知していた。それゆえ「最も言及に値する」ものだけを取り上げるのだと、彼は繰り返し読者に説明している¹⁰⁾。

ギリシアに関して、語るに値するもの全てを語ること——それが『案内記』の主題であったとして、次なる問題は、その場合のギリシアの意味である。パウサニアスが「ギリシア」という言葉を使う場合、その意味する範囲は、実のところ一定していないのだ。

先ほど述べたように、『案内記』の叙述範囲は属州アカイアの領域と概ね一致するのであるから、単純に考えれば、この範囲がパウサニアスにとってのギリシアだということになる。けれどもその場合、彼自身その出身であるところの小アジアの諸市はどうなるのか。あるいはエーゲ海に浮かぶ島々は……。それらはギリシアの一部ではないのか。このように考えただけでも、問題は既に複雑な様相を呈する。さらにはマケドニアやエペイロスについてさえ、それらがギリシアに含まれるか否かについての彼の考えは一貫していない¹¹⁾。パウサニアスのギリシアは文脈次第で自在に伸縮するのである。

だが、その伸縮の仕方には一定のパターンが見て取れる。例えば、イオニアとマケドニア、エペイロスに関して、それらがギリシアに含まれる場合に共通しているのは、何らかの対立項の存在である。すなわち、イオニアがギリシアの一員として描かれる時にはペルシアが、マケドニアとエペイロスがギリシアに含まれる時にはローマが、それぞれギリシアに対立する存在として想定されている¹²⁾。したがって、何か外部に共通の対立項を措定し得る場合、ギリシアの範囲が広がり、通常はギリシアの一部と見なされないものまで、その一部になるのだと推測できる。この伸縮の仕方を分析し、その傾向をつかむことは、パウサニアスのギリシア観を理解する1つの方法である。

しかし、彼のギリシア観を論じたこれまでの諸研究では、かかるギリシア観の伸縮を分析するために極めて重要な観点が、ほとんど考慮されないままになってきた。それは、諸都市・諸地域といったギリシアを構成するローカルな集団との関係において、パウサニアスのギリシア観を理解する視点である。従来の研究においては、『案内記』をローマ支配に対する反発として理解しようとする傾向が顕著だったために、ペルシアやマケドニア、ローマといった対外勢力とギリシアとの関係に関心が集中する一方で、こうしたローカルな次元が取り上げられることはほとんどなかったのである。

けれども、このようにローマ支配とギリシア人の関係を単純な二項対立で読み解く立場

は、セカンド・ソフィスティックやローマ期ギリシアの研究において徐々に相対化されつつある¹³⁾。これによって当然ながら、当該時期の文化におけるパウサニアスの位置づけも再考を迫られることになった。しかしながら、彼のギリシア観を巡る議論においては、かかる二分法を前提とした解釈に対する批判こそあるものの、それに取って代わる有効な解釈はいまだ不在の状況である。したがって本稿では、個々の都市や地域との関係に注目することにより、パウサニアスのギリシア観についての新たな解釈を提示するとともに、刷新されつつある帝政期の文化理解の枠組みに『案内記』を再定置する糸口を示したい。

第1章 研究史の概観と問題の所在

第1節 従来のパウサニアス理解

ローマ支配の現状を嘆き、往きて還らぬギリシアの自由と、自由のために戦った人々の追憶のために筆を執った「愛国者」¹⁴⁾——後に研究史上の革新と言われることになるその著作において、Ch. Habicht はパウサニアスの信条をこのように描き出した¹⁵⁾。その根拠として彼が挙げたのは以下の2点である。1つには、パウサニアスのギリシア史への関心が、前146年以前に限定されていること。これはアカイア同盟がローマに降伏した年であり、ギリシアの自由の終焉を決定づける画期の年にあたる。ギリシアの自由を愛するがゆえに、パウサニアスは前146年以降の歴史を無視したというのだ¹⁶⁾。2点目は、ペルシア戦争、カイロネイアの戦い、ラミア戦争、ガリア人のギリシア侵入（前279年）という4つの戦争への度重なる言及である。これらの戦争の際に各都市がどちらの陣営につき、どのような貢献をしたのかにパウサニアスは度々言及し、時に非難や賞讃を表明している¹⁷⁾。Habicht に言わせれば、この4つは全てギリシアの自由を守るための戦いであり、ゆえにギリシアの自由への貢献を尺度として、パウサニアスが各都市を裁定していることは明らかなのである。

Habicht において顕著なのは、このように「ギリシアの自由」を『案内記』理解の中心に据える立場であり、「自由」の有無という観点から、ローマ支配下のギリシアと、往古のギリシアとを対比的に捉える傾向である。但し、その際に彼が参照しているのが、専ら非ギリシア勢力との対立局面におけるギリシアであることには注意が必要である。今日に至るまで、彼のこの見解は、パウサニアス理解の方向性を強く規定してきた。

Habicht に最も近い見解を表明しているのは、本邦におけるパウサニアス研究を牽引した馬場恵二である。同胞のギリシア人に「民族の自覚」¹⁸⁾を促した「民族の宗教と歴史」の案内人¹⁹⁾として、彼はパウサニアスの事業を理解している。J. Elsner の研究も、ローマ支配との対立のもとに『案内記』を理解する点では同様であった。彼は、『案内記』が描き出すギリシアが、相対立する多様なアイデンティティの在り方を反映する礫岩の如きもののだとして、ギリシア内の都市や地域に一定の重要性を認めている。しかしその上で、こうした多様性や地域間の分裂こそが、かえってギリシア全体をまとめ上げる共通の神話となり、ローマ

という他者と対立する、ギリシア共通のアイデンティティを生み出していると主張するのである²⁰⁾。

さらに S. Alcock の研究も、この点では同様、というよりむしろ、パウサニ阿斯とローマ支配の対立関係を一層強調するものであった。ギリシア人による非ギリシア人撃退の歴史を語ることで、ローマ支配のもとで危機にさらされていたギリシア人のアイデンティティを守ること、これこそが『案内記』の真の主題であり、したがって、その根底にあるのはローマ支配に対するある種の抵抗だと、彼女は主張したのである²¹⁾。セカンド・ソフィスティックの文脈でパウサニ阿斯を研究した S. Swain もやはり、ローマによるギリシア支配とパウサニ阿斯との緊張関係を前提に『案内記』を理解している²²⁾。W. Ameling の論考は、歴史叙述の伝統の中にパウサニ阿斯を位置づけつつ、その歴史観の独自性を探った労作であるが、これも非ギリシア勢力に対するギリシアの団結を称揚する「パンヘレニズム」の理念を、パウサニ阿斯の歴史認識の要として位置づけている²³⁾。

Elsner を除けば、これらの研究は、パウサニ阿斯がギリシア諸都市を評価する基準についての Habicht の見解に同意している。すなわち、パウサニ阿斯が各都市をそれに照らして評価する試金石は、その都市がギリシア全体の自由や繁栄を守るための戦いに参加したかどうかであるというのだ²⁴⁾。したがって、彼らがギリシア内の個々の都市についての叙述に注目する場合でも、それはこの見解に合うような箇所限定して行われる傾向にあった。その結果、外威に対してギリシアを守る、ペルシア戦争やガリア人の討伐に関する記述が焦点化される一方で、ギリシアを構成する単位である個々の都市同士の関係性への関心は、背景に退かざるを得なかった。最も顕著なのは Alcock の場合で、パウサニ阿斯にとってのギリシアを非ギリシアに対立するものとして捉え、ここにローマ支配に対する反抗の含意を読み取ろうとするあまり、彼がギリシア人同士の争いを叙述している場合をもこの図式だけで解釈する²⁵⁾。つまり、ギリシアと非ギリシアという前提がギリシア内の対立を覆い隠す結果になっているのである。

第2節 パウサニ阿斯研究の新展開と本稿の立場

このようにギリシアとローマ、支配と被支配の二分法を前提に作品を理解しようとするアプローチは、何もパウサニ阿斯研究に限られたものではなかった。同時代の文学を研究するうえでも、かつてはこのような二分法が支配的だったと言える。しかしながら、帝政期の文化全般に関する研究の進展は、当時の文化、社会の全体像を大きく刷新しつつある²⁶⁾。

まずもって指摘すべきは、現実からの逃避やローマ支配に対する密かな抵抗として理解されることの多かった、古典期ギリシアへの関心の集中について、それが当時の人々にとっては、現在の意義を持っていたことが重視されるようになった点である。つまり、都市間競争²⁷⁾に明け暮れるギリシア諸都市であれ、帝国の文化的エリートたるソフィストであれ、彼らが古典期にその興味を集中させたことは、帝国の中で特権や名誉を得るという、優れて現

在的な関心に根差す行為であったということが注目されるようになってきたのだ²⁸⁾。

パウサニアスについても、彼が現在よりも過去に多くの紙幅を割いていることは、夙に多くの研究者によって指摘されてきた²⁹⁾。上述の通り、ローマ支配に対するパウサニアスの反感を指摘するうえで Habicht がその根拠としていたのも、『案内記』が示すこうした関心の偏重であった。けれども、過去への関心が当時の文化の基底にあって、しかも単なる追憶以上の現在の機能を果たしていたとするなら、それを即座にローマ支配への反発と結びつけるような主張には、批判的な再検討が必要であろう。

加えて、当時の文化の担い手たちは *πεπαιδευμένοι* (教養人) と呼ばれ、その中にはギリシア人のみならず、共通の *παιδεία* (教養) を共有する、ローマ世界の多様な人々が含まれていた。そしてその教養の中心にあったものこそ、古典期のギリシア文学であった³⁰⁾。したがってこの点から言っても、往古のギリシアへの関心の集中を、安直に反ローマ的態度の表明とする理解を踏襲することはできない。

こうした流れを踏まえ、M. Pretzler や W. Hutton など近年のパウサニアス研究者は、同時代の広く複雑な文化的ネットワークの中で『案内記』を理解しようとしている。ギリシアとローマの二項対立を前提とすることなく、新たな作品理解の枠組みを模索しているのである。

さらに一步踏み込んで、Habicht らの議論に対する直接的な批判を試みる研究も登場した。2005 年に発表された J. Akujärvi の論考である。彼女はまず、従来多くの研究が、パウサニアスの歴史観を「パンヘレニズム」的なものと解釈してきたと述べる。つまり、非ギリシア勢力に対するギリシアの団結を強調、賞讃する一方で、ギリシア人同士の争いにはなるべく言及せず、言及する場合には一貫してそれを非難する態度を、『案内記』に見出してきたというのだ³¹⁾。そのうえで彼女は、このような見方を真向から批判する。曰く、非ギリシア勢力に対してギリシアの団結を掲げるような理想を、『案内記』から読み取ることはできない。パウサニアスにとってのギリシア史とは、畢竟、ギリシア内部での絶えざる対立に貫かれた歴史であり、かかる現実的な歴史認識において、ギリシアの自由とはギリシア人同士の絶えざる闘争に他ならない³²⁾。その証拠にパウサニアスは、非ギリシア勢力の脅威を前にしても団結しきれないギリシア人の姿を、ためらうことなく描き出している³³⁾。もし彼が、外威に対するギリシアのまとまりを強調することを目指したのなら、このような書きぶりにはならなかったはずだ。では、パウサニアスがそのような叙述を通して伝えようとしたこととは何だったのか。Akujärvi の大胆な推測によると、ギリシアの歴史が異民族に対する団結の歴史として美化されがちであることに反発して、『案内記』はそれに対する修正を試みているのである³⁴⁾。かかる主張内容もさることながら、そこに至るアプローチにこそ、彼女の批判の独自性が表われている。すなわち、ギリシア内の都市同士の戦争に関する叙述についても、独立した1章を設けて詳細な検討を行ったのである³⁵⁾。まさにローカルな次元を重視することで、Akujärvi はパウサニアスのギリシア観を巡る議論に新たな展開をもたらしたと言え

る。

けれども後述する通り、外威を前に団結する理想的な「ギリシア」という従来の見方を否定するのに急な余り、彼女が提示したオルタナティブはあまり説得的なものとはならなかった。絶え間ない内紛に満ちた現実的な「ギリシア」像というその結論は、結局のところ「パンヘレニック」なギリシア像の単なる否定でしかなく、ローカルな要素との関係におけるギリシアを正面から捉えきれていない。したがって Akujärvi の研究は、その方法論において極めて斬新であったものの、その運用に際しては不十分な点が多かったと言わざるを得ない。

この点で、2009年に上梓された Ch. Frateantonio の研究こそは、『案内記』におけるローカルな次元の重要性を正面から扱ったものであると言える。彼女の説によると、『案内記』の主題選択の背景には都市間競争がある。都市間の争いにおいて、ギリシア諸市はギリシア人共通の神話や歴史に目を向け、その中での自己の系譜や存在感の大きさを示すことによって、他に対して優位に立とうとした。結果としてこれは、地域や都市ごとに異なる多様な伝承の併存状態を生み出した³⁶⁾。Frateantonio によると、これによって生じたギリシア共通の歴史や神話を巡る論争に裁定を下し、それを通してギリシア諸市をひとつのヒエラルヒーのもとにまとめ上げようとしたのが、パウサニアスなのである³⁷⁾。

この理解においては、ギリシア全体の神話や歴史にかかわる記述も、都市間競争への応答として捉えられる。つまり、ギリシアそのものが主題であり叙述の目的であるというよりは、それを媒体として諸都市の格づけをすることに目的があると解釈することができるのである。尤もここで筆者は、『案内記』を読むうえで都市を中心にすべきか、それともギリシア全体を中心にすべきか、という問いに答えを出そうとしているわけではない。しかしながら、非ギリシア勢力とギリシアとの対比に関心を集中させる傾きのあった従来の研究を批判して新たな解釈を提示するうえで、都市というローカルな次元を中心に据えた Frateantonio のアプローチは大変示唆的である。これによってこそ、Akujärvi が先鞭をつけた批判の方向性を徹底させ、個々の都市や地域との関連でパウサニアスのギリシア観を把握することが可能になる。

第2章 善行者の系譜におけるギリシア観

第1節 善行者たち

本章で最初に検討するのは、『案内記』第8巻第52章である。この箇所は、パウサニアスのギリシア観を分析するうえで重要な記述とされながら、従来ローカルな枠組みとの関係では、不十分にしか検討されてこなかった。加えてその解釈を巡っては複雑な論争がある。以下では、最初に当該箇所の内容を確認したうえで、諸研究の見解を整理し、最後にローカルな次元から見た新たな解釈を提案したい。

アルカディアの都市テゲアで、パウサニアスは本像が失われた台座を目にする。その台座には、メガロポリス出身でアカイア同盟の将軍として活躍した、ピロポイメンの事績を讀える碑銘が刻まれていた³⁸⁾。これを導入として、ピロポイメンの生涯が伝記風に叙述される³⁹⁾。その後に続くのが、問題の箇所である⁴⁰⁾。

(1) そうして、その後すぐに、ギリシアは立派な人々を産み出すのをやめてしまった。すなわち、キモンの子ミルティアデスは、マラトンにやってきた非ギリシア勢を戦闘で破り、メディア人の遠征部隊の進軍を食い止めることによって、最初のギリシア全体にとっての善行者となったが、クラウギスの子ピロポイメンは、その最後の人となったのである。ミルティアデスより古い時代に輝かしい功績を示した人々は、メラントスの子コドロスにしても、スパルタのポリュドロスにしても、メッセニアのアリストメネスにしても、そのほか誰にせよ、各々自分の父祖の地を守ったのであって、ギリシアを全体として助けたわけではないことは明白である。(2) ミルティアデスより後には、アナクサンドリデスの子レオニダスとネオクレスの子テミストクレスが、後者は二度にわたる海戦で、前者はテルモピュライの戦いで、ギリシアからクセルクセスを追い出した。リュシマコスの子アリストイデスと、クレオンプロトスの子パウサニアス⁴¹⁾は、プラタイアにおいて指揮を執ったが、一方においてその後の不正はパウサニアスがギリシアの善行者と呼ばれることを妨げ、他方アリストイデスの方は、島々に住むギリシア人たちに貢租を課したことが[彼がギリシアの善行者と呼ばれることを妨げた]。アリストイデス以前には、ギリシア人全体が貢租を課されていなかったのである。(3) それから、アリプロンの子クサンティッポスとキモンは、クサンティッポスの方はスパルタの王であったレオテュキデスとともにミュカレにおいてメディア人の艦隊を殲滅し、他方キモンには、ギリシア人のための多くの賞讃に値する功績があった。けれども、アテナイ人に対するペロポネソス戦争に従事した者たち、その中でも特に名声を得た者たちに関しては、彼らは身内殺し、ギリシアを海に突き落とすも同然のことをした輩だと言えるだろう。(4) しかし、既に苦境にあったギリシアの人々を、ティモテオスの子コノンと、ポリュムニスの子エパミノンダスが立ち直らせた、コノンの方は島々と沿岸部の諸ポリスから、エパミノンダスは海から内陸の方に入った諸ポリスから、ラケダイモン人の駐屯兵や総督を追放し、デカダルキアを終わらせることによって、エパミノンダスはまた、とるに足らないものではないポリス、メッセネとアルカディアのメガロポリス[の創建]によっても、ギリシアの評判を高めた。(5) 私は、レオステネスもアラトスも、ギリシア全体の善行者であると考え。レオステネスの方は、ペルシア人たちのところにいた傭兵約5万人が海辺まで下りてきたのを、船でギリシアまで連れ戻してやった、しかもアレクサンドロスが不承知であるにもかかわらずである。もう一方のアラトスの諸々の功績は、私の本のシキュオンについての巻が、既に明らかにした。

(6) ピロポイメン像についていた、テゲアの碑銘は「以下の通りである」。

ギリシア全土に「轟く」、これらの立派な徳と思慮、一方でその豪胆さによって、他方でまたその構想によって、多くの功績を、アルカディアの槍兵ピロポイメンは刻苦して勝ち取った、槍「兵」の指揮官であった彼には、戦いにおいて、大いなる栄光が付き従った。[その栄光は] スパルタの僭主らに対する、2つの精巧な戦勝記念碑が明示している。彼は、[当時] 増大しつつあった隷属を取り除いたのである。以上の理由で、テゲアは高邁な志を持ったクラウギスの息子、完全無欠の自由をもたらした人「の像」を立てる。

以上見てきた通り、ピロポイメンを最後に「善行者」(εὐεργέτης) の系譜は途絶えたとの認識に立ち、パウサニ阿斯はそれ以前の歴代の善行者たちを列挙していく。このような内容から、本稿ではこれを「善行者リスト」と名づけ、以後言及する際にはこの表記で統一する。善行者とされる者は全部で10名、反対にその名誉を否定されている者および集団は合わせて6つある。これらを言及される順番に並べたうえで、それぞれに番号を付して整理すると次のようになる⁴²⁾。

善行者として挙げられているのは次の者たちである⁴³⁾。

- ①ミルティアデス (第1節) ②ピロポイメン (第1、6節) ③レオニダス (第2節)
- ④テミстокレス (第2節) ⑤クサンティッポス (第3節) ⑥キモン (第3節)
- ⑦コノン (第4節) ⑧エパミノンドス (第4節) ⑨レオステネス (第5節)
- ⑩アラトス (第5節)

善行者とは呼べないと言われている者は以下の通りである。

- ①コドロス (第1節) ②ポリュドロス (第1節) ③アリストメネス (第1節)
- ④アリストイデス (第2節) ⑤(スパルタ人の) パウサニ阿斯 (第2節)
- ⑥アテナイ人に対するペロポネソス戦争に参加した者たち (τοὺς δὲ ἐπὶ τοῦ Πελοποννησιακοῦ πρὸς Ἀθηναίους πολέμου) (第3節)

ここで重要なのは、パウサニ阿斯が善行者を判定する際の基準である。第1節にある通り、「善行者」とは、「自分の父祖の地」(πατρίδας τὰς αὐτῶν) ではなく、「ギリシアを全体として」(ἅθροαν τὴν Ἑλλάδα) 助けた者でなくてはならない。かかる内容ゆえに、パウサニアスのギリシア観を論じた研究は、例外なくこの記述を参照してきた。本稿がこれを最初に取り上げるのもそのためである。

とはいえ、これほど長い歴史叙述は、個々の都市や地域を順々に巡っていく『案内記』のような作品にあっては例外的な脱線であり、それゆえパウサニアスのギリシア観を代表する記述とは言えないのではないかとの疑念もあろう。けれども、『案内記』の記述がモニュメントや彫刻など、目で見ることのできるもの (θεωρήματα) だけではなく、それらにまつわる神話や歴史 (λόγοι) をもふんだんに含んでいることは広く認められている⁴⁴⁾。そして両

者は、そのどちらが優位にあるかを容易に決することができないほどに緊密に絡み合っており⁴⁵⁾、まさに作品を動かす両輪の歯車の如くに機能しているのである⁴⁶⁾。

実際この「善行者リスト」の記述も、ピロポイメン像の台座の話をきっかけとして始まり、最後はこの台座に刻まれた碑銘の引用をもって締めくくられている。その意味でこれは、ギリシアを巡る行路から遊離した抽象的な「脱線」ではなく、彫像の台座という、触知可能な対象に紐づけられた語りなのである⁴⁷⁾。

また、『案内記』中で神話や歴史(λόγος)に分類される記述の中には、「善行者リスト」以上の長大な歴史叙述も決して稀ではない。分量にして第4巻の約8割を占めるメッセニア史に関する記述などは、その好例である⁴⁸⁾。

加えて、「善行者リスト」で善行者として列挙される者たちは、『案内記』の他の巻でも広く取り上げられている著名人ばかりである。キモン(⑥)とアラトス(⑩)に関して、パウサニアスは彼らの功績を改めて述べることはせずに、既にそれについて触れた他巻の記述を参照するよう促している。キモンについては第1巻及び第8巻、アラトスについては第2巻がその参照先である⁴⁹⁾。その他の善行者たちについても、言及は作品全体に渡っている。したがって「善行者リスト」は、各巻に散在している偉大な人々についての記述を集約して「ギリシア全体の善行者」の系譜に統合するものであり、それによって作品に一体感を与える極めて重要な役割を果たしているのである。

以上のことからして、これが『案内記』のギリシア観を代表するような記述だと考えることには、相応の根拠があると言えよう。それでは、節を改めて諸研究の整理に移りたい。

第2節 解釈を巡る論争

最初に Habicht の見解を検討してみよう。前章第1節で確認した通り、パウサニアスが個々の都市や個人を評価する基準は、ギリシアの自由への貢献度だというのが、彼の見解であった。当然「善行者リスト」も、ギリシアの自由に貢献した者たちの一覧として扱われる⁵⁰⁾。Swain の見解も同様である⁵¹⁾。また Ameling は、「善行者リスト」を「パンヘレニズム」の表れとして、ここに理想化されたギリシアの過去を見て取っている⁵²⁾。

これらに対して Akujärvi の研究では、「善行者リスト」は全く別の仕方で扱われる。繰り返しになるが、非ギリシアに対するギリシア団結の理想という解釈を批判するのが彼女の狙いであった。それゆえ、スパルタと戦った②、⑦、⑧、⑩が善行者とされていることがその批判の根拠となる。ここでパウサニアスは、ギリシア人同士の争いの勝者を賞讃しているからである。したがって「善行者リスト」は、ギリシアの団結を掲げる「パンヘレニック」な理想の表明とは言えないというのだ⁵³⁾。

このように両陣営の解釈は真向から対立しているが、細かく見ていくなら、4者とも「善行者リスト」を統一的に説明することには困難を覚えている。Habicht は、「アテナイ人に対するペロポネソス戦争に参加した者たち」という⑥の記述を、「ペロポネソス戦争に参加し

た両陣営への非難」だと解釈して、ここにギリシア人同士の争いに対する深い慨嘆を見出したが、そうすると、エパミノンドス（⑧）がスパルタを破ったことゆえに賞讃されていることが説明できない。これもギリシア人同士の争いだからである。エパミノンドスが成し遂げたレウクトラでの戦勝は、ギリシアの自由をもたらしたがゆえに例外的に賞讃されているのだと Habicht は主張するが、かく言ったところで、パウサニアスの言葉の繰り返しに過ぎず、その説明にはなっていない⁵⁴⁾。むしろここで問うべきは、なぜスパルタに対する勝利が「ギリシア全体のための」貢献のうちに数えられているのかということであろう。

他方、この矛盾を鋭く突いた Akujärvi の批判もまた、別の問題を抱えていた。Habicht と同様に Akujärvi は、⑥の記述をペロポネソス戦争に参加した両陣営への非難だと解釈する⁵⁵⁾。ところがこのように解釈すると、ギリシア人同士の争いをパウサニアスが慨嘆している場合を認めることになるから、そのような慨嘆を否定する彼女の説には不都合になるのである。

他方で、上の2人とは異なり、Swain と Ameling は⑥の記述を、ペロポネソス戦争に関してスパルタ側のみを批判した記述と理解している。この解釈に基づき、前者はこの箇所にはパウサニアスの「親アテナイ主義」(Philattizismus) を⁵⁶⁾、後者は、アテナイをギリシア文明の中心とする見解を読み取っている⁵⁷⁾。しかしこのように解釈するなら、Ameling の場合には、ギリシア内の特定の都市に肩入れする傾向が、ギリシア全体の団結を強調する「パンヘレニズム」と、いかに矛盾なく接合しているかを説明する必要があるだろう。また Swain のように、これをギリシアの自由を主題とした箇所であると理解するのであれば、その中心にアテナイが来るということの意味を説明してこそ、パウサニアスのギリシア観を十分に解明したことになろう。ところが、2人ともこれらの点については沈黙している⁵⁸⁾。

かくしていずれの解釈も、「善行者リスト」に一貫した説明を与えることはできていない。そして興味深いことに、4人が解釈に困難を覚えている箇所は、全てギリシア内の都市同士の争いに関係しているのである。したがって、「善行者リスト」が表明するギリシア観を理解する鍵は、やはりローカルな次元に求められるのである。

第3節 「アテナイ人に対する」ペロポネソス戦争

ローカルな次元にも配慮しつつ「善行者リスト」を再解釈するためには、まず諸研究の解釈が分かれる⑥の記述を正確に理解する必要がある。善行者の対極にある存在として痛烈に非難されている者たちは、「アテナイ人に対するペロポネソス戦争に参加した者たち」(τοὺς δὲ ἐπὶ τοῦ Πελοποννησιακοῦ πρὸς Ἀθηναίους πολέμου) だが、争点となっているのは、この言い回しが誰に向けられているかということである。「アテナイ人に対する」(πρὸς Ἀθηναίους) という表現を重視すれば、これはアテナイの敵、すなわちスパルタ陣営に対する非難だということになる。他方で、「ペロポネソス戦争に従事」(ἐπὶ τοῦ Πελοποννησιακοῦ πολέμου) という点を重視して、「アテナイ人に対する」の部分は特に意味のない付加的な説明だと考えれ

ば、これはペロポネソス戦争に参加した全ての者たちへの批判だと受け取れる。

もしいわゆるペロポネソス戦争を指すのに、「アテナイ人に対するペロポネソス戦争」という呼称が一般的に使われていたなら、あるいは「アテナイ人に対する」と並んで、「スパルタ人に対する」という修飾句が多く著述家によって意味の区別なく使われていたなら、後者の説が正しいと言えるだろう。一方で、パウサニアスがここでアテナイの敵だけを意味していると主張するなら、「～に対する」という箇所、対象を限定するような書き手の意図が読み取られ得ることを示さなくてはならない。いずれにしても、当時のペロポネソス戦争の表記法を分析する必要がある。

G. de Ste Croix がペロポネソス戦争の表記法の変遷についてまとめたものに従うと、「ペロポネソス戦争」(ὁ πόλεμος Πελοποννησιακός / Πελοποννήσιος) という名称の初出は前 1 世紀のディオドロス・シケリオテスであり、一般にペロポネソス戦争を記した史家として知られるトゥキュディデスにこの表記は見られない。また彼が挙げている例を見る限り、「ペロポネソス戦争」という表記の成立以後は、この戦争に言及する場合、「～に対する」や「～と～との」などという説明的な修飾を行うことなしに、端的に「ペロポネソス戦争」と書くことの方が一般的であったようである⁵⁹⁾。しかし、敢えて「～に対する (πρός) / ～と～との間のペロポネソス戦争」という表記を用いる例が、パウサニアスの当該箇所以外にも確認できる。それはこの呼称の初出とされるディオドロスである。彼は、「ペロポネソス戦争と呼ばれる、アテナイ人のラケダイモン人に対する戦争」(τὸν γενομένην πόλεμον Ἀθηναίους πρὸς Λακεδαιμονίους τὸν ὀνομασθέντα Πελοποννησιακόν) という表現を用いているのである⁶⁰⁾。では、この表記からディオドロスの特定の意図を読み取ることは可能だろうか。興味深いのは、ペロポネソス戦争はアテナイがスパルタに対して仕掛けた戦争だという見解を彼が表明していることである⁶¹⁾。かくして、「アテナイ人のラケダイモン人に対する」という表現は、この見解と対応するものと考えることができる。尤も、近接する箇所に「アテナイ人とラケダイモン人の間に」という中立的な表現も見えるため⁶²⁾、表記が戦争原因についての見解と常に一致するとは言い切れない。とはいえ、「ラケダイモン人に対するペロポネソス戦争」と書いておきながら、戦争原因はスパルタ側にありとする用例、あるいは反対に「アテナイ人に対する」と書いておきながら、アテナイが戦争を始めたとする用例は確認されていない以上、戦争の原因についての書き手の見解と表記との間に、有意の連関を読み取ることの妥当性は、暫定的なものとして認められるであろう。

では、当のパウサニアスの場合はどうかというと、果たして彼は、「善行者リスト」とは別の 2 つの箇所において、ペロポネソス戦争の原因がスパルタ側にあるとの見方を示しているのである。そのうちの 1 つを引用する⁶³⁾。

しかしステネライダスという、ラケダイモン人の間で万事に権力があり、彼らのエボロイの 1 人であった者が、その時とりわけ戦争の原因となった。この戦争こそが、まだ

良い状態にあったギリシアを根底から動揺させたのであり、その後も、アミュンタスの子ピリッポスが、既に腐敗してすっかり健康でなくなっていたギリシアを、さらに追い打ちをかけて荒廃させたのである⁶⁴⁾。

ここには、スパルタ側に開戦の責任があったとする見解がはっきりと表明されている。したがって、ディオドロスにおいて確認した、表記と戦争原因についての見解の相関を考慮に入れると、“τοὺς δὲ ἐπὶ τοῦ Πελοποννησιακοῦ πρὸς Ἀθηναίους πολέμου” が「アテナイ人に対して仕掛けられたペロポネソス戦争」というニュアンスを含んでいる蓋然性は高いと言える。

けれども、戦争の原因がスパルタにあるというニュアンスがこの表記に含まれるとしても、その戦争に関与した者のうちには、やはり受けて立つ側のアテナイ人も含まれるのではないか。このように考えることも依然可能である。しかし、「ギリシアをわが手で殺した犯人であり、ギリシアを海へ投げ込む海賊同然」という激しい非難の言葉は、この批判が主として、批判の対象となっている者たちの好戦性、攻撃性に向けられたものであることを示唆しているのではないだろうか。それゆえここに、パウサニアスの認識では戦いを受けて立った側のアテナイ人も含まれるとは考え難いだろう。また仮にアテナイ人も含まれるとしたところで、この言い回しにおいて、戦端を開いたスパルタ側の責任が重く見られていることは動かし難いだろう。そう解すれば、「ペロポネソス戦争」と端的に記すこともできたのに、敢えて「アテナイ人に対する」と述べていることからして、この箇所ではアテナイに対して戦争を仕掛けた（とパウサニアスが考える）スパルタを中心とする陣営が非難されていると解釈することが妥当である。

以上により、これをスパルタ陣営のみに対する非難と理解した、Swain 及び Ameling の解釈が妥当なものだと言える。他方、これを戦争に参加した両陣営への非難だとする Habicht と Akujärvi は、「アテナイ人に対する」という表現に込められたパウサニアスの意図を見落としていることになる。

第4節 ローカルな観点からの再解釈

けれども⑥に関する記述が、ペロポネソス戦争に関してスパルタ陣営のみを非難していることは確かだとしても、Ameling や Swain のように、それを「親アテナイ主義」やアテナイ中心的な立場の表れとして説明することの妥当性は、別途検討する必要があるだろう。彼らの議論は、ローカルな枠組みを中心に「善行者リスト」を解釈しているわけではないからである。

前章第2節で紹介した Frateantonio の見解を参考にするなら、「善行者リスト」は、パウサニアスのギリシア観を語っていると同時に、「ギリシア全体への貢献」という尺度を使って、個々の都市や地域に関する彼の考えや評価を語っているとも考えられる。こうしてローカルな次元を焦点化して見た場合、⑥以外にも関連する記述が見いだされるかもしれない。

「親アテナイ主義」が妥当な解釈かどうかは、それらを踏まえた上で判断されねばならないだろう。

そこで、個々の都市や地域に注目しつつ善行者たちの肩書を見ると、最初に注意をひくのは10名の善行者の出身地である。アテナイ出身者が6人と抜きんで多く、次いでアカイア同盟から2人、スパルタとテバイからそれぞれ1人が選出されている⁶⁵⁾。10名の善行者の中にアテナイ出身者が6人も入っていることは、ギリシア全体に対する貢献におけるアテナイ人の貢献の大きさを物語っている。この点は、⑥を「親アテナイ主義」の表明と見る見解とも親和的である。

ところが、上記の者たちが善行者たる、あるいは善行者たり得ない根拠として、パウサニアスが挙げている功績を分析すると、別の側面が見えてくる。10人の善行者たちの功績は、全て何らかの対立関係の中で成し遂げられたものなのである。その内訳はというと、①、③、④、⑤、⑥⁶⁶⁾は全てペルシア戦争でペルシアからギリシアを守った者たち、②、⑦、⑧、⑩はいずれもスパルタに勝利した者たち、⑨⁶⁷⁾、⑩⁶⁸⁾はマケドニアと戦った者たちである。

ここで着目すべきは、善行者たる根拠となっている対外的な勝利のうち、4つがスパルタに対する勝利だということである。そもそも「ギリシア全体」のための功績に、スパルタに対する勝利が含まれるということ自体が奇妙に思われる。何よりも、『案内記』の第3巻は「スパルタ」の巻なのであり、その意味で、スパルタはパウサニアスにとってのギリシアに当然ながら含まれていたはずなのである。そしてこれこそ、Akujärviが批判の論拠とした点であった。つまり、非ギリシアに対するギリシアの団結を説くつもりなら、スパルタに対する勝利を「ギリシア全体に対する」貢献のうちに含めるはずはないというわけだ。この批判は十分検討に値する。

とはいえ、ペルシア戦争の英雄（①、③、④、⑤、⑥）から始めてギリシア全体の善行者を列挙するという構想自体が、Ameling言うところの「パンヘレニズム」的な色彩を帯びていることは否定しがたい。なぜならそれは、非ギリシアに対するギリシアの勝利を讃美するという形式と極めて親和的だからである。したがって、ここにスパルタに対する勝利者（②、⑦、⑧、⑩）が含まれるからといって、即座に「善行者リスト」にギリシア団結の理念を見る解釈が否定され、代わって、内紛を自然状態とする現実的な「ギリシア」像が立ち現れてくるということにはならない。Akujärviの批判の限界はこの点にあるので、やはりペルシア戦争が要請する、非ギリシア対ギリシアという構図の重要性を無視することはできない。この構図は認めたくえてローカルな次元をも考慮に入れるためには、次のように問いを立て直すべきであろう。すなわち、ペルシア戦争やマケドニアとの戦いの英雄と並んで、対スパルタ戦の勝者をも「ギリシア全体の」善行者の系譜の中に数え上げることが可能であったのはなぜなのか。

これについて、「親アテナイ主義」で説明できるのは、スパルタに対して勝利したアテナイ人コノン（⑦）が善行者である理由だけである。しかし、アテナイ人以外がスパルタと

戦って賞讃されている②、⑧、⑩の場合、これでは説明がつかない。あるいは②と⑩に関して、パウサニ阿斯はスパルタの「僭主」に対する勝利ということを強調しているので、この2つは「僭主嫌い」ということで説明できるかもしれない⁶⁹⁾。けれどもその場合、僭主支配下にあるわけではないスパルタに勝利した⑦、⑧が善行者リストに加えられていることが説明できなくなる。

これに対して、先に見たペロポネソス戦争に関するスパルタ陣営批判（⑥）を含め、②、⑦、⑧、⑩の全てを説明することのできる解釈が1つある。それは、パウサニ阿斯の認識において、スパルタがギリシアの敵であったと考えてみることである。だがその場合、スパルタのレオニダス（③）が善行者に含まれることはどう説明されるのか。これについては、非ギリシア勢力との戦いという文脈が重要であろうと思われる。「はじめに」で述べた通り、ローマとの対立という文脈では、通常非ギリシア勢力に数えられるマケドニアやエペイロスも、ギリシアの一員になっていた。これと同様、外部に対立項を設定し得る場合はスパルタもギリシアの中に含まれるが、ギリシア内部の争いにおいては、スパルタはギリシアから排除されるのだと仮定すればよいのである。つまり、ギリシア内部の争いにおいては、対立する両陣営のいずれかに「ギリシア全体」の利益を代弁させることになるので、結果としてギリシアの範囲自体が縮小する。そしてその場合、スパルタは常にギリシアの外にはじき出されることになるのだ。

全ての先行研究が「善行者リスト」に一貫した説明を与えられなかった理由は、ここにあるのではないだろうか。彼らは例外なく、「善行者リスト」における「ギリシア全体」が、何か確固たる単一の概念であるかのように論じてきた。けれども以上の考察から明らかになった通り、この箇所には、ペルシアやマケドニアに対峙するものとしての「ギリシア」のほかに、スパルタに対峙するものとしての「ギリシア」があり、それによって「ギリシア全体」という言葉の意味自体が伸縮しているのである。

第3章 プルタルコスとの比較

第1節 比較の前提

前章の分析から、「善行者リスト」には意味の異なる2つの「ギリシア」が併存していることが明らかになった。それゆえ、パウサニ阿斯のギリシア観を明らかにするためには、この相異なる「ギリシア」同士の関係を解明する必要がある。前者の意味における「ギリシア」については、前章で確認した通り、既に多くの研究が注目してきた。対照的に、スパルタに対立するものとしての「ギリシア」は、そもそもその存在に気づかれることすらなかったと言える。

スパルタに対立する「ギリシア」という発想はパウサニ阿斯に固有のものであろうか、それともこれは、彼が参照した史料に帰せられる見解なのだろうか。この問いに答えるべく、

本章では、時代的にやや先行するプルタルコス『英雄伝』との比較を行う。プルタルコスを比較相手とするのは、ピロポイメン (②) とアラトス (⑩) に関して、パウサニアスが『英雄伝』を参照した、あるいは両者が共通の史料に基づいて書かれた可能性が指摘されているからである⁷⁰⁾。

とはいえ、プルタルコスとの差異を示すだけで、即座にパウサニアスの独自性を確保できるわけではない。というのも、これはせいぜい、パウサニアスの見解がプルタルコスのそれとは異なることを証明するのみであって、前者の立場が何かまた別の史料に由来する可能性は依然残り続けるからだ。実際アカイア同盟の歴史に関して、パウサニアスがプルタルコスの他に、親アカイア的な立場で書かれた史料に依拠した可能性は既に指摘されている⁷¹⁾。さらにおよそあらゆる叙述に関して、他の史料の影響を推定することは可能である。そうすると最終的には、パウサニアスの独自性など種々の参考文献の中で霧消してしまうのではないか。『案内記』を単なる多様な情報の宝庫と見なす傾向が顕著であった時代には、確かにそのように考えられることも多かった⁷²⁾。

けれどもかかるアプローチは、「書き手」による史料選択のプロセスという重要な契機を見落としているのではなかろうか。これから見ていく通り、プルタルコスは、少なくとも②、⑩に関して、パウサニアスと異なる見解を示している。したがって、パウサニアスがプルタルコスを参照していたとすれば、彼はその見解を知ったうえで敢えて異なる説を唱えていたことになる。とするならば、その異なる説が何に由来するにせよ、自余の選択肢を排して1つの説を採用したという点に、パウサニアスの主体性を主張し得る余地が出てくる。もっとも、パウサニアスがプルタルコスを参照していない可能性もある。しかしその場合でも、共通の史料に依拠しつつ両者が異なる見解に到達したのだとすれば、史料選択におけるパウサニアスの独自性を主張することは依然として可能だと言える。かくしていずれの場合であっても、プルタルコスとの比較を通して、反スパルタ的傾向が、パウサニアス自身が主体的に選び取った立場であるかどうかを論じることができるのである⁷³⁾。

第2節 アラトスの評価を巡る見解の相違

以上の点を前提にしたうえで、パウサニアスとプルタルコスとで、両者の対応する記述を比較してみよう。アラトス (⑩) に関して双方の見解の相違が顕著なのは、スパルタの僭主クレオメネスとアラトスとの対立に関してである。パウサニアスにとって、アラトスがこの僭主を追放したことは、「ギリシア全体」の善行者たるにふさわしい功績の1つであった。ところが、プルタルコスの書きぶりは大きく異なっている。

〔アラトスは〕ギリシア人の何人にも相応しくないこと、彼にとって最も恥ずべき、彼自身によって成し遂げられてきたことにも、政策としてなされてきたことにも最も相応しくないことへと向かっていった、すなわち、アンティゴノスをギリシアに呼び寄

せ、自身が若いころペロポネソスから追い出したマケドニア人、そのマケドニア人たちでペロポネソスを充たしたのである⁷⁴⁾。

クレオメネスを倒すためにマケドニアのアンティゴノスと結んだこと、これをギリシア人にあるまじき行為だとして、プルタルコスが痛烈に非難しているのである。では、なぜこれがギリシア人にあるまじき行為なのか。その答えは「アラトス伝」中に探ることができる。

クレオメネスが、彼は（実際）そう言われねばならないわけだが、不法でかつ僭主的な人物であったとしても、その祖先はヘラクレイダイであり、その祖国はスパルタであって、この国（スパルタ）の最も無名な人物の方が、マケドニア人中の第一人者よりも支配者とするに値するのである、ギリシアの生まれの高貴さを少しでも考慮する者たちにとっては⁷⁵⁾。

つまり、スパルタに君臨しているのが不法な僭主であろうが、苟も同じギリシアの生まれの者と干戈を交えるなど言語道断というわけだ。結局のところ、最も重く見るべきは「ギリシアの生まれの高貴さ」（τὴν Ἑλληνικὴν εὐγένειαν）であり、これこそが敵味方を分かつ絶対的な基準なのである。

「善行者リスト」中では明言されていないが、アラトスがマケドニアと結託してスパルタを討ったことは、当然パウサニ阿斯も承知していた。

クレオメネスは、パトライを越えてデュメ付近で戦い、その時もアラトスがアカイア軍を指揮していたが、戦って（これに）勝利した。このことは、アカイアの人々と当のシキュオンを心配したアラトスに、アンティゴノスを援助者として招き入れることを余儀なくさせた⁷⁶⁾。

戦況の悪化がアンティゴノスの援助を得ることを「余儀なくさせた」（ἠνάγκασεν）という表現に、プルタルコスの見解のような批判めいた響きはない。それどころかむしろ、パウサニ阿斯はアラトスの決断を弁護しているようにさえ見える⁷⁷⁾。

この件を巡る両者の見解の違いには Swain も言及しているが、彼はただこれを指摘するにとどまっている⁷⁸⁾。しかしながら、「善行者リスト」における2つの「ギリシア」の関係を考える上で、この違いは非常に重大なものである。

第3節 非ギリシア勢力の介入

注目すべきは、非ギリシア勢力の介入という要素である。ギリシアと非ギリシアの境が、

敵味方の分かれ目であるとするプルタルコスにとって、ギリシア人同士の争いはいかなる場合にも避けられねばならない。ましてや、非ギリシア勢力を動員して同じギリシア人を討つなどもつてのほかである。対照的にパウサニアスの場合、スパルタの覇権を阻止することが至上命題であり、そのためであれば、ギリシアと非ギリシアの別など考慮する必要がない。だからこそマケドニア人の助力を頼むことも許容できる。つまり、パウサニアスは、プルタルコスのようにギリシア対非ギリシアという対立軸を設定し得たにもかかわらず、あくまでもスパルタとそれ以外の「ギリシア」との対決に拘っているのだ。彼がアラトスを善行者の系譜に数えることができたのは、まさにこのためだと言えよう。

これを踏まえるなら、スパルタがギリシアの利害から排除される理由として、前章第4節で立てた推論は間違いであったことになる。すなわち、単にギリシア内部の争いだから、スパルタがギリシアから排除されたというわけではなかったのである。少なくともアラトスに関しては、ギリシアと非ギリシアの別を重視する立場から、彼がマケドニアの手を借りてまでスパルタと戦ったことを批判することも可能だったはずだからだ。これこそプルタルコスの立場であった。けれどもパウサニアスは、プルタルコスのその見解とは反対に、敢えてマケドニアと「ギリシア」の対決よりも、スパルタと「ギリシア」の対決を重視した。つまり、後者の意味における「ギリシア」を前者より重く見ているのである。

さらにピロポイメン（⑩）に関しても、両者の見解の間には同様の差異が指摘できる。パウサニアスのピロポイメンに対する評価については、「善行者リスト」の末尾にある碑銘からの引用が、その要約となっている⁷⁹⁾。すなわち、スパルタの僭主から全ギリシアを解放した英雄というのが、彼がピロポイメンに与えた評価であった。プルタルコスもピロポイメンの功績は十分に認めており、この人をギリシアが生んだ最後の偉人と見なす点では、両者の見解は一致している⁸⁰⁾。しかしながら、以下に引用するプルタルコスの言葉が示す通り、その評価の内実には明確な相違がある。

こうして、ギリシア人に対する善行の大きさに関しては、ピロポイメンも彼より優れた非常に多くの人々も、ティトゥス〔フラミニヌス〕と比べるには値しない。というのも、ギリシア人であった彼らの方は、ギリシア人に対して敵となったのに、ギリシア人でなかった彼〔フラミニヌス〕は、ギリシア人のために〔戦った〕からである⁸¹⁾。

プルタルコスに言わせれば、ピロポイメンがいかに傑物であったにせよ、同胞たるギリシアの一員スパルタと戦った以上、そのギリシアへの貢献は限定的である。したがって、ここでもプルタルコスは、対スパルタ戦を「全ギリシア」のための戦いとして賞讃するパウサニアスとは、一貫して異なる立場をとっているのである。

さらに、ペロポネソス戦争に関する両者の見解にも同様の相違が見られる。先に見た通りパウサニアスは、ペロポネソス戦争に関してスパルタ側だけを糾弾していた（⑥）。プルタ

ルコスにあっても、ペロポネソス戦争をギリシア衰退の原因と見なす点は同様である。しかし彼は、アテナイとスパルタのどちらかだけを非難することはせず、むしろギリシア人同士の争いが、ペルシアを利する結果となったことを悔やむような書きぶりを示しているのである⁸²⁾。

また、アラトス（⑩）に関する両者の比較から浮かび上がってきた非ギリシア勢力の介入という観点は、「善行者リスト」そのものの分析にも新たな知見をもたらす。というのも、この観点から善行者たちを見た場合、実は非ギリシア勢力と手を組んでスパルタと戦ったのは、アラトスだけではないからだ。『案内記』第3巻によると、スパルタ王アゲシラオスによる対ペルシア遠征への参加をアテナイが断った背景には、コノン（⑥）がペルシア王からの援助取りつけを画策していたという事情があった⁸³⁾。この目論見に成功した彼は、ペルシアの支援を背景にスパルタの海上覇権を覆すことになるが、パウサニ阿斯はこれについても、特に非難する風もなく第1巻及び第6巻で言及している⁸⁴⁾。「善行者リスト」で「ギリシアの人々を立ち直らせた」と賞賛されるコノンの功績には、ペルシア王の支援が背景にあり、パウサニ阿斯はこのことをよく知っていたのである。にもかかわらず、コノンに関するいずれの記述も批判の意図を含んでいないことからして、スパルタを非ギリシア勢力以上に敵視する姿勢は、作品全体に一貫していると言えよう。

第4章 反スパルタ主義とギリシア史観

第1節 スパルタの性格づけ

前章での分析から明らかになった通り、ペルシアやマケドニアとの対立よりも、スパルタとの対立を優先する態度は、作品全体を貫く強固なものであった。かかる一貫した態度を指すのに、「反スパルタ的傾向」という漠然とした言葉では、もはや不十分であろう。これは単なる傾向というより、むしろ一個の思想、主義と言えるような確固たる立場だと言ったほうがよいのではないか。そのような意味で、以下でパウサニ阿斯の反スパルタ的態度に言及する場合は、「反スパルタ主義」という表現を用いたいと思う。

しかしそもそも何ゆえに、パウサニ阿斯はスパルタに対して批判的な態度を取っているのか。いかなる点において、スパルタは「ギリシア全体」の利害に対立する存在であるのか。この点を明らかにするには、一度ギリシア観の分析から離れ、スパルタそのものに関する記述を分析する必要がある。

スパルタについての記述が集中している第3巻「ラコニア」については、既に多くの研究がなされている。その中で特に本章の主題と関連しているのは、第1章第2節で紹介した Frateantonio の研究である。彼女の見解では、都市間競争を裁定して、ギリシア諸市を1つのヒエラルヒーにまとめ上げることが、『案内記』の隠れた主題であった。その際、各都市に与えられたヒエラルヒー内での地位を示しているもの、それは都市ごとに付与された特定

の性格づけである。

では、スパルタにはどのような性格づけが与えられているのだろうか。まず彼女の整理をもとに、当時の一般的なスパルタ・イメージをまとめると次のようになる。彼らの美質と考えられていたのは、ローマ人とも重ね合わせられる身体的強さ、さらには秩序だった国制、そして買収や賄賂の誘惑に屈しないことなどであった。また、ペルシア戦争や対マケドニア戦争におけるその功績も、よく知られるところであった⁸⁵⁾。

ところが、パウサニアスは、こうしたスパルタの肯定的側面にはあまり触れず、むしろスパルタの負の側面を強調しているというのが Frateantonio の見解である。第3巻中のスパルタに関する叙述を通して、間接的ではあるものの、野蛮さや好戦的性格といった否定的な性格づけが一貫して示されているというのである⁸⁶⁾。

Frateantonio の解釈には疑問に思える点も多いため、その主張を全面的に受け入れることはできないが⁸⁷⁾、少なくともその主張のうち、好戦的性格が強調されているとの指摘は妥当なものと言える。これについては、彼女が詳細に論じているのでここで付け加えることはしないが、本節では、Frateantonio も時折言及しているスパルタ人と賄賂の関係について、少し立ち入って分析してみたい⁸⁸⁾。

スパルタ人と賄賂の結びつきに関しては、第3巻以外にも言及がある。特に、第4巻のメッセニア戦争に関する記述は、この関連で極めて重要である。

(2) 戦争の3年目に、「大溝」⁸⁹⁾と呼ばれる場所で合戦が行われることになり、メッセニア人のところには、アルカディア人がその全ポリスから加勢に来ていた。ヒケタスの子でトラベズスのアリストクラテスは、この時アルカディア人たちの王であり、彼らの中で将軍を務めていたのだが、これをラケダイモン人は金銭でもって買収した。すなわち我々の知っている中で、ラケダイモン人が最初に、敵に贈り物をして、戦場における勝利が金で買えるものだというにしまったのである。(3) だが、ラケダイモン人がメッセニア戦争中に掟を破って、アルカディア人のアリストクラテスの裏切りが[生じる]よりも前は、戦士らは卓越性と神からの運に勝敗をゆだねていた。しかしそれ以後も、アイゴス・ポタモイにおいてアテナイの艦隊と相対した時に、アデイマントスははじめアテナイ人たちの将軍であった他の者たちを、ラケダイモン人が買収したのは明らかである。(4) けれども時を経て、ラケダイモン人自身にも、世に言う「ネオプトレモスの報い」⁹⁰⁾が回ってきた。その所以は、アキレウスの息子ネオプトレモスがヘルケイオスの祭壇でブリアモスを殺した後、自分もデルポイでアポロンの祭壇の付近で殺されるという事態に見舞われたからである。このことから、人が自分もやったようなことを被るとき、これを「ネオプトレモスの報い」という。(5) そしてラケダイモン人には、彼らが最盛期にあってアテナイの艦隊を打ち負かし、アゲシラオスが小アジアの大部分を征服し終えていた時、その時に彼らには、メディア人から全ての支配権を奪い取

ることが許されなかった。それどころか、バルバロス〔メディア人〕は彼ら〔ラケダイモン人〕自身の発明したものでもって、〔すなわち〕コリントスとアルゴス及びアテナイとテバイに金銭を送ることにより、彼ら〔ラケダイモン人〕を出し抜いたのである。この金銭からコリントス戦争と呼ばれる戦争が燃え立たされ、かくしてアゲシラオスは小アジアでの事業を断念せざるを得なくなった⁹¹⁾。

この通り、スパルタがメッセニア側についていたアルカディア王を買収して勝利を得たことに関して、彼らこそ戦場に賄賂を持ち込んだ最初の者たちだったとパウサニ阿斯は述べているのである。さらに彼は、贈賄を「ラケダイモン自身の発明」(τῷ ἐκείνων εὐρήματι) とまで呼んでいる。

そして興味深いことに、話題が「ネオプトレモスの報い」に及ぶと、その内容は「善行者リスト」とも直接関係してくる。パウサニ阿斯の記述によると、賄賂により勝利を得てきたスパルタも、後に自らの発明品によって小アジア遠征の中止を余儀なくされた。ペルシア側が用意した金銭によって、「コリントス戦争」が勃発したためである。ここでは述べられていないものの、この「コリントス戦争」の帰趨を決めたクニドスの海戦で、スパルタ艦隊を破った者こそ、前章第3節でペルシアとの協力関係が明らかになった、あのコノンであった(⑥)。

こうして、収賄の発明者というスパルタの性格づけは、「善行者リスト」におけるスパルタの位置づけに対する、ある種の説明になっていると言える。まずもって、第3巻で収賄に関する話題が頻出するために、読み手は収賄をスパルタと強く結びつけることになる。続く第4巻ではさらに、贈賄の発明者という不名誉な称号がスパルタに与えられる。この関連で「ネオプトレモスの報い」に話題が及び、スパルタが後に賄賂でもって出し抜かれた「コリントス戦争」の発端が語られる。これを読んだ読者は、コノンが「報い」の実現において大きな役割を果たしたことを容易に理解できる。なぜなら、前章第3節で指摘した通り、コノンとペルシア王の結託については第1、3、6巻で繰り返し指摘されているからだ。こうして、第8巻に至って「善行者リスト」で取り上げられるまでに、間接的な連関を通して、コノンの功績の意義が説明されてしまっているのである。

第2節 衰退史観

しかし贈賄の発明者であるということが、なぜそれほどに罪深いことなのか。これに関して鍵となるのは、『案内記』第7巻に見える「裏切り」行為に関するパウサニ阿斯の見解である。

事態はそこまで進行した。不遜な企てのうちでも最も汚らしいのは、私利のために父祖の土地と同胞市民を裏切ることだが、それがアカイアの人々にも、災厄の発端をも

たらすこととなった。開闢以来、[こうした裏切りが] ギリシアからなくなることは絶えてなかった。ヒュスタスベスの子ダレイオスがペルシア人たちの王であった時、イオニアの人々の事業は、11 人を除く他のサモス人の三段櫂船長たちがイオニア艦隊を裏切ったために挫かれたのである⁹²⁾。

彼にとって「裏切り」(*προδοσία*) はギリシアの宿痾であり、ペルシア戦争の時代からローマ支配の到来に至るまで、ギリシアが裏切りから解放されることは絶えてなかった。引用部分に続く箇所ではパウサニアスは、ギリシアの諸都市を苦しめた裏切りの数々を列挙していくが、それはさながら、「善行者リスト」に対応する「裏切り者リスト」のようである⁹³⁾。

では、この見解が贈賄とどのように関係しているのか。前節で引用した「賄賂の発明」に関する記述の中に、「ラケダイモン人がメッセニア戦争中に掟を破って、アルカディア人のアリストクラテスの裏切り (*προδοσίαν*) が[生じる] よりも前は・・・」という一節がある⁹⁴⁾。「掟を破った」というのはつまり、それまでの慣例に反してスパルタ人が戦場に賄賂を持ち込んだことを指している。したがって、その賄賂によって裏切りが生じたと言われているのである。

もちろん、これをもってスパルタ人が裏切り行為の発明者だということにはならないが、裏切り行為を誘発するような贈賄の慣習を始めたのがスパルタ人だと言われていることは、極めて重要である。裏切りはギリシアを蝕む不治の病のように考えられているのであるから、それを惹起する贈賄を戦場に持ち込むことは、病人に毒を盛るも同然の所業である。パウサニアスからすれば、スパルタは贈賄をもたらすことにより、ギリシアに巣食う病を悪化させた憎むべき存在なのである⁹⁵⁾。そういう次第であるから、ペルシアからの賄賂によって生じた戦争でスパルタが挫折したことは、まさに当然の報いだった。こうして、パウサニアスの反スパルタ主義には、スパルタが「贈賄の発明者」であるとの認識が関係していることが明らかになった。

さらに重要な点は、「贈賄」を激しく非難する背景には、裏切りの病に憑かれたギリシアという暗澹たる像があるということだ。先に引用した裏切りに関する記述は、様々な点で「善行者リスト」と対をなしている。まずもって興味深いのは、善行者たちの功績が何らかの対立関係の中で成し遂げられたものであったのと同様、ここでの裏切り行為も全て、裏切りによって利益を得た敵対勢力との関係において語られていることである。

この対立関係に着目して裏切り行為を分類してみると、「善行者リスト」との符合が浮かび上がる。対立項自体が共通しているのである。すなわち、ペルシア、スパルタ、マケドニアの3者である。裏切りの系譜の場合は、ここに更にローマが加わる⁹⁶⁾。尤も、ここでの裏切り者は必ずしも「ギリシア全体」を裏切ったものに限定されていないので、スパルタが対立項に含まれること自体が、「ギリシア」対スパルタという構図を明示しているわけではない。だが、そこにスパルタが加えられていることは、善行者リストと同様、ギリシアの利

害と対立する存在としてのスパルタの位置づけを暗示していると言えるだろう。

しかし両箇所はこうした共通性を持ちつつも、その与える印象は大きく異なっている。ギリシア全体を守った「善行者」の系譜と、ギリシアを害した「裏切り者」の系譜とを比べているのだから、異質に見えるのは当然だが、印象の違いはそれだけに解消されるものではない。両者は相異なる2つのギリシア史観を表明しているように思われるのである。すなわち、外敵に対して団結する「栄光のギリシア」と、内部の裏切りによって自滅していく「衰退のギリシア」である。反スパルタ主義の源泉を追求していくと、かくしてパウサニアスのギリシア史観を巡る問題に逢着する。

そこでギリシア史観に関連する記述を探してみると、「衰退のギリシア」を思わせる記述が、第7巻中の他の2つの箇所においても確認できる。そのうちの1つを引用する。

(1) ギリシアは、当時は特にあらゆる点で弱体化していた。その一部は始めから、ダイモンによって踏みにじられ、破壊されていたのだが。アルゴスは、いわゆる英雄時代には最盛期を迎えたポリスであるが、ドリス人（の手）に渡るとともに、テュケーの好意から見放されてしまった。(2) アッティカの人々は、ペロポネソス戦争と疫病から回復し、再び上向きの状態にあったが、その後何年もたたないうちに、マケドニア人の繁栄が彼らを圧伏する定めとなっていた。マケドニアからは、ボイオティアのテバイにも、アレクサンドロスの憤怒が襲いかかった。ラケダイモン人には、テバイのエパミノondas（との戦争）、そしてまた、アカイア人との戦争が生じた。そうして、踏みにじられて大方干上がった木のようにになっていたギリシアから、ようやくアカイア同盟という新芽が吹き出でた時には、將軍職にあった者たちの卑劣な所業が、これをもその成長の途中で切り取ってしまったのである⁹⁷⁾。

この箇所及び第7巻の第6-7章⁹⁸⁾の同種の記述においては、かつてギリシアの覇者であった有力勢力の系譜が叙述されている。両箇所に共通するのは、アテナイ、スパルタ、テバイ、アカイア同盟という系譜だが、「善行者リスト」の場合とは反対に、ここでスパルタは、いわばギリシアの主役の系譜の中に位置づけられている。

しかしその基調をなすのは、衰退史観と呼び得るようなギリシア史認識である。ギリシアにはもはや強力な勢力がなくなったとして、パウサニアスは、かつて有力であった諸勢力の衰退理由を列挙している。その詳細を見てみると、アテナイ衰退の因をなしたのは、ペロポネソス戦争とマケドニアに対する敗北であったが、テバイもまた、マケドニア人によって大きな損失を被った。スパルタの失墜をもたらしたのは、レウクトラでの敗北、およびメガロポリス、メッセネ両市の建設、次いでアカイア同盟との戦であった。またアカイア同盟については、その歴史の詳細が『案内記』第7巻にあるので、これも踏まえて考えると、彼らの衰退の直接の原因はローマとの戦争にあるが、その背景にあったのはスパルタとの対立で

あった⁹⁹⁾。さらに「卑劣な所業」とある通り、アカイア同盟は、將軍らの裏切り行為によって、ローマの軍門に下ることになった。かくしてギリシア諸都市の衰退をもたらしたのは、スパルタ、マケドニア、ローマの3つの勢力であると言える。

ここで想起されるのは、「裏切り者リスト」の内容である。そこでは、ペルシア、マケドニア、スパルタ、ローマが、裏切りを利用する側として言及されていた。すなわち両箇所におけるギリシア諸都市の敵は、ペルシアを除いて共通しているのである。さらに言えば、「裏切り者リスト」は「善行者リスト」とも対立項を同じくしていたのであるから、当然、この衰退の記述と「善行者リスト」についても、同様の共通因子が指摘できる。したがって、このような観点で捉えるならば、衰退や裏切りを特徴とする暗澹たるギリシア像と、「善行者リスト」の栄光のギリシア像との間には、存外、類似点が見出せることになる。けれどもここで注意せねばならないのは、「裏切り者リスト」及び衰退の記述における、ペルシア、スパルタ、マケドニア、ローマの4者は、あくまでもギリシア内の個々の都市や同盟に対する敵対者であって、ギリシア全体に対するそれではなかったということである。その証拠に「裏切り者リスト」の、先の引用に続く箇所には、諸都市の中でスパルタだけがマケドニア王ピリッポスへの寝返り、裏切りの害を免れたとの記述がある¹⁰⁰⁾。スパルタは、ここではギリシアの一員だと理解されているのである。また先に引用した衰退の記述でも、あくまでもギリシア衰退の1つのエピソードとして、パウサニアスはスパルタの衰退を語っている¹⁰¹⁾。したがって、「裏切り者リスト」及び衰退の記述におけるギリシアは、スパルタをも含む意味での「ギリシア」であり、これは「善行者リスト」に見られる、スパルタと対峙する「ギリシア」とは区別して考える必要がある。実際、エパミノンドスの記述において、この相違は明確な矛盾となって表出する。第7巻から引用した衰退の記述では、スパルタも「ギリシア」の一員であるから、スパルタの失墜をもたらしたエパミノンドスの事績は、「ギリシア」の衰退をもたらす一原因として言及されていると解されるべきである。ところがその彼が、「善行者リスト」では「ギリシア全体にとっての善行者」と述べられているのである¹⁰²⁾。

第3節 衰退史観を越えて

こうした点を踏まえると、パウサニアスは2つの異なるギリシア観を持っているように思われる。片や善行者の系譜に貫かれた「栄光のギリシア」、片や裏切りに憑かれ、非ギリシア人、ギリシア人入り混じっての戦争に満ちた「衰退のギリシア」である。ここで注目したいのは、仲間うちの闘争による衰退過程としてギリシアの歴史を捉えることは、パウサニアスの独創ではないということである¹⁰³⁾。例えば、ペロポネソス戦争をギリシア衰退の原因とする見解は、当時多くの著述家が共有するものであった¹⁰⁴⁾。したがって、「裏切り者リスト」や衰退の記述は、当時の一般的な歴史観を反映しているものと考えられる。それゆえ、むしろ特筆すべきは「善行者リスト」の側なのである。なぜならこれは、古典期から前2世紀に至る期間の歴史を、善行者の系譜を通して、一貫して肯定的な側面から描き出している

からである。そしてここにこそ、衰退史観の影響及びそれとの緊張関係の中でパウサニ阿斯が生み出したギリシア史観が現れていると見ることはできないだろうか。

既に指摘した通り、「善行者リスト」には、相異なる「ギリシア」が併存していた。すなわち、スパルタに対立する「ギリシア」と、ペルシアやマケドニアに対立する「ギリシア」である。第3章以下の分析はこの2つの「ギリシア」の関係を解明することを目指してきたわけだが、実はこのギリシアの二重性こそが、「善行者リスト」が一貫して肯定的なギリシア像を描き出すことを可能にしているとは言えないだろうか。

ペルシア戦争の名将ミルティアデスを筆頭に置いて、「ギリシア全体」の善行者の系譜を書き継ぐとすれば、そこには当然、ペルシアに比すべき、「ギリシア全体」の敵対者が必要になる。マケドニアはそのような存在になりえたが、しかしそれだけでは、断絶なく系譜を書き継ぐことはできなかった。なぜなら、ギリシアの歴史はギリシア人同士の闘争の歴史でもあったからだ。ギリシア人同士の争いは、そのままではペルシア戦争のような「ギリシア全体」のための戦いと同列に捉えることはできない。そこでパウサニ阿斯は、「ギリシア全体」の敵をギリシアの中に見出したのではなかろうか。つまり、スパルタをギリシアから排除することによって、スパルタ対「ギリシア」という対立構図を構築し、それによって、「ギリシア全体」を助けた偉大な人々の系譜を、前2世紀まで延長させることができたのではないか。

もっとも、前章の分析が明らかにした通り、一見ギリシア人同士の争いに見えるものにも、非ギリシア勢力の介入があったりするから、ギリシアと非ギリシアの別を重視する立場から、これを批判することも可能であった。それもまた、一種の「ギリシア全体」を説く立場であり、まさにプルタルコスが立脚した視座であった。しかし、パウサニ阿斯は敢えてこれを取らずに、「ギリシア全体」自体の範囲を縮小させることで、前2世紀に至るまでのギリシアの歴史を、自らもその影響下にあった衰退史観的な叙述から解放し、ギリシア古典期とそれ以後のギリシア史を、栄光の系譜の中に統合する道を選んだ。

では、何ゆえに彼はこのような歴史の読み替えを敢行したのだろうか。当然、その背景に反スパルタ主義があり、さらにその根拠として、裏切りの発明者というスパルタ人の性格づけがあったことは、これまでの分析からして明らかである。しかし、「裏切り者リスト」における暗澹たるギリシア像と類似のものを探して、衰退の叙述へと分析を進めた今となつては、実はこの暗いギリシア像の中にこそ、反スパルタ主義の根拠・契機が含まれていたのではないかとも思えてくる。

第7巻から引用した衰退の記述を、諸勢力の衰退理由に注目しつつ読んでいくと、1つの共通項が浮かび上がる。その全てにスパルタと他のギリシア人との対立が絡んでいるのである。まず、アテナイ衰退の根本原因はスパルタとのペロポネソス戦争にあった。次に、スパルタの失墜をもたらしたのは、レウクトラでの敗北およびアカイア同盟との戦いであったが、そのアカイア同盟がローマの介入を許すことになった背景にも、やはりスパルタとの対

立があった。他方テバイの場合は、マケドニア人によって弱体化させられたとされているので、スパルタの直接的関与は読み取れない。けれども他の記述と引照するなら、この遠因もやはり、スパルタと他のギリシア人の対立にあったと言える。第8巻のある箇所、スパルタに対するアルカディアの敵意が、マケドニアの勢力拡大を招いたとされているからである¹⁰⁵⁾。

パウサニアスのスパルタ理解の本質はここに表れているのではないだろうか。つまり、常にギリシア支配をもくろむ危険分子というスパルタ像である。そしてだからこそ、そのスパルタが賄賂を発明したことは憎むべきことと思われたのではないか。それは、ギリシア人同士の争いの中心にある危険分子が、「ギリシア全体」を裏切り行為で攪乱するために生み出した恐るべき「発明」だったということになるからである。したがって、衰退史観の枠の中でも、彼は衰退を単なる内部分裂の過程と捉えていたわけではなく、その中心点にスパルタという「悪」を置いていたのではないだろうか。かかる認識は「善行者リスト」におけるスパルタの位置づけを暗示し、同時にパウサニアスの反スパルタ主義の根拠を提示するものでもあると解釈することができる。

このような理解から「善行者リスト」までは、もう一歩踏み出すだけである。そこで「善行者リスト」での評価を、衰退の原因として上で列挙したものに当てはめると、次のようになる。アテナイの衰退をもたらした「身内殺し」であるスパルタを、「ギリシア全体」の善行者エパミノンドスが追い落とす。そのエパミノンドスのテバイはマケドニアの前に膝を屈するが、アカイア同盟が「ギリシア全体」の希望をつなぐ。けれども、またしてもスパルタの妨害に遭って、その抗争の仲裁役を務めたローマに最終的に屈服する。一見中立的に見える衰退の記述は、対応する善行者リストの記述を踏まえて読むと、全く違う姿で立ち現れてくる。それは、スパルタからギリシアを守り、奪還するも、最後は力尽きるという悲劇の物語として読むことができるのだ。

かくして、一見矛盾しているように見える「善行者リスト」と衰退の記述、およびそのそれぞれが提示するギリシア史観は、実は反スパルタ主義によって内的に連関していることが明らかとなった。また別の角度から見れば、両箇所が相互に補い合うことによって、パウサニアスの反スパルタ主義はその根拠づけを与えられ、その輪郭を露わにしていると解することもできる。反スパルタ主義を介して、2つのギリシア史観がこのように相互に連絡・循環している点にこそ、パウサニアスのギリシア観の本質があるのではなかろうか。

おわりに

本稿では、ローカルな次元に注目しつつ、パウサニアスのギリシア観を理解するというアプローチをとってきたが、これによって、彼のギリシア観が持つ多重性、多義性という、これまで指摘されてこなかった重要な側面が見えてきた。『案内記』中には、スパルタに対す

る「ギリシア」、ペルシアやマケドニアに対する「ギリシア」という2つの「ギリシア」が共存しており、この2つの「ギリシア」の揺らぎの中で、「衰退のギリシア」と「栄光のギリシア」が、緊張をはらみつつ融合していたのである。

この知見は、ギリシアと非ギリシアの二分法に囚われずに『案内記』を読み解くための突破口になり得るのではないか。特にこの観点から検討することが有益だと思われるのは、ギリシアが最終的にローマの支配圏に組み込まれる過程である¹⁰⁶⁾。これはアカイア同盟とスパルタの争いに、ローマが介入を強めていく過程であった。ローマに対する広義の「ギリシア」、スパルタに対する狭義の「ギリシア」という2つの視点が、パウサニアスの叙述の中で混ざり合っていることに留意しつつ、この箇所の分析を行えばどうなるか。彼が最も重視する境界線は、必ずしもギリシアとローマの間に引かれているとは限らないのである。これによって、今では論じつくされた感のあるローマ支配を巡る問題を、新たな視角から再検討することができるかもしれない。そして、その延長線上で、刷新されつつあるローマ期のギリシア研究における、パウサニアスの位置づけを再考することも可能になるのではなかろうか。

一方パウサニアスの歴史観についても、さらなる研究が必要である。ギリシアの衰退や栄光という言葉で表現してきた彼の歴史の見方が、ギリシアの歴史叙述上、いかなる伝統に属し、同時代の歴史観の中でいかなる位置を占めていたのかに関しては、本稿では到底明らかにし得なかった。しかしながら、『案内記』を歴史叙述という観点から捉えるためには、ブルタルコスにとどまらず、同時代の著作家及び先行する諸史料との網羅的な比較検討が必要であろう。そうした視点からの研究も、今後の課題である。

注

※史料名等の略称は、Hornblower, S. and Spawforth, A. (eds.), *The Oxford Classical Dictionary*, 4th ed., Oxford, 2012 に準ずる。また註の中で言及する文献に関しては、初出時のみ十全な書誌情報を記載し、それ以降は著者名とページ番号を記すにとどめた。但し、同一の著者につき複数の著作を引用している場合に限り、二度目以降の言及の際にも出版年を併記した。

- 1) ギリシア語原題は *Περὶ Ἑλλάδος*。περίηγησις という語の意味、及び文学ジャンルとしての περίηγησις については Hutton, W., *Describing Greece: Landscape and Literature in the Periegesis of Pausanias*, Cambridge, 2005, pp.247-263. 『案内記』という書名及びパウサニアスという著者名は、作品中には一度も登場することがなく、ビュザンティオンのステパノスという後6世紀の人物が、パウサニアスの作品として『ギリシア案内記』(*Περὶ Ἑλλάδος*) に言及していることから、初めてそれと知られる。また写本に関しては、15世紀にイタリアに運ばれたとされるものが最も古く、他は全て直接、間接にこの写本に基づいて作成されたと考えられている。Habicht, C., *Pausanias' Guide to Ancient Greece*, Berkeley, 1998 (1985), pp.1-2; Rocha-Pereira, M., *Pausanias Graeciae Descriptio (Bibliotheca Teubneriana)*, vol.1, Leipzig, 1989, p.vii の写本の系統図を参照。
- 2) 『案内記』は、後160年代初頭から170年代頃にかけて執筆されたと考えられている。Habicht, *op. cit.*, pp.9-11; Bowie, E., "Inspiration and Aspiration: Date, Genre, and Readership", in: Alcock, S., Cherry, J. and Elsner, J. (eds.), *Pausanias: Travel and Memory in Roman Greece*, Oxford, 2001, pp.21-23; Pretzler, M., *Pausanias: Travel Writing in Ancient Greece*, London, 2007, pp.23-25; Hutton,

- op. cit.*, pp.17-18; Frateantonio, C., *Religion und Städtekonkurrenz: Zum politischen und kulturellen Kontext von Pausanias' Periegesis*, Berlin, 2009, S.6. 全ての研究が指摘しているのは、『案内記』が多年に及ぶ調査旅行を通して執筆された作品だということである。執筆の具体的なプロセスを巡っては議論があるが、この作品が一度きりの旅行の記録ではなく、複数回の調査に基づき、同一の場所についても複数回訪れたうえで執筆されたものだという Hutton の指摘は重要なものである。Hutton, *op. cit.*, pp.25-28.
- 3) しかし属州アカイアに含まれていたアイトリアを、パウサニアスは叙述していない。属州アカイアと『案内記』が描く領域のずれについては Habicht, *op. cit.*, p.5 の註 27、Pretzler, *op. cit.*, pp.6-7 を参照。
- 4) *Περιήγησις* と銘打たれた作品群の中で、『案内記』はその空間的射程の広さにおいて他を圧倒している。Hutton, *op. cit.*, pp.255-256.
- 5) 『案内記』の読者層を巡る議論はどれも仮説の域を出ない。というのも、『案内記』についての言及、あるいはそこからの引用とはっきり断定できる記述が、同時代の他の著作の中に見当たらないからである。Habicht, *op. cit.*, p.1; Pretzler, *op. cit.*, p.27. 尤も、アイリアノスやピロストラトス、ロンゴスがパウサニアスに依拠した可能性は指摘されており、加えて、あらゆる史料が残存しているわけではないので、『案内記』が実際に読まれた可能性を排除することはできない。Bowie, *op. cit.*, pp.29-31.
- 6) パウサニアスの 19 世紀以降の受容史に関しては、Habicht, *op. cit.*, pp.165-175; Pretzler, *op. cit.*, pp.12-13. 『案内記』が考古学に与えた具体的な影響については、Alcock, S., "The Peculiar Book IV and the Problem of the Messenian Past", in: Alcock, S., Cherry, J. and Elsner, J. (eds.), *Pausanias: Travel and Memory in Roman Greece*, Oxford, 2001, pp.146-149. なお改めて指摘するまでもないことだが、Alcock が研究手法として地表踏査 (surface survey, field survey) を重視したのは、『案内記』を含め、従来考古学が依拠してきた文献史料が孕むバイアスを相対化するためであった。Alcock, S., *Graecia Capta: The Landscapes of Roman Greece*, Cambridge, 1993.
- 7) Hutton, *op. cit.*, pp.265-271 によると、『案内記』の如き大部な作品には序文を付すのが通例であった。それゆえ、今日残っている伝承が『案内記』の当初の姿を完全にとどめたものであることを疑問視する研究もある: Bowie, *op. cit.*, pp.27-28. これに対して、唐突に見える始まり方、そしてそれと対応するかのような唐突な終わり方を伝承上の欠陥とはとらえず、そこにパウサニアスの文学的意図を読み取ろうとする試みも見られる: Frateantonio, *op. cit.*, S.6-7, 33-36. また Hutton も上に挙げた箇所で、唐突な書き出しを文学的工夫と解釈して、ここにアッリアノスの『黒海周航記』(*Περίπλους Εὐξείνου Πόντου*) の影響を推定している。しかし少なくとも第 10 巻に関しては、伝承の過程で部分的に損なわれたか、もしくは計画した範囲まで執筆されなかった可能性がある。Habicht, *op. cit.*, pp.6-7; Pretzler, *op. cit.*, p.8.
- 8) Habicht, *op. cit.*, p.142 によると、パウサニアスのパーソナリティに関する研究は 1970 年代の末になってようやく始まった。パウサニアスの出身地について有力なのは、主としてこれを小アジア西部、リュディア地方はシピュロス山麓の都市マグネシアとする説である。Habicht, *op. cit.*, pp.13-15; 馬場恵二「パウサニアス『ギリシア案内記』研究 —パウサニアスと古代アテネ市内地誌—」『明治大学人文科学研究所紀要』別冊 10、1990 年、84 頁; Bowie, *op. cit.*, pp.24-25; Hutton, *op. cit.*, pp.9-11; Pretzler, *op. cit.*, p.21. cf. Frateantonio, *op. cit.*, S.8-10. また『案内記』中の記述からは、パウサニアスの旅行歴も知ることが出来る。そこには、小アジアやシリア地域、さらにはシチリア、ローマ、エジプトなど、地中海沿岸の広い地域が含まれる。Pretzler, *op. cit.*, p.32 の註 2 を参照。だが、こうした類推によるものを除けば、彼の経歴は全くの謎に包まれている。
- 9) Paus. I.26.4. 本稿でのパウサニアスからの引用は全て、筆者自身の訳による。底本としたのは、Rocha-Pereira, *op. cit.* 訳出に際して参照した注釈及び翻訳は以下の通りである。Frazer, J., *Pausanias's Description of Greece*, 6 vols., London, 1898; Hitzig, H. und Blümner, H., *Pausaniae Graeciae Descriptio*, 3 Bde., Berlin, 1896-1910; Hogan, P., *A Student Commentary on Pausanias*, Ann Arbor, 2014; Pausanias, trans. by Levi, P., *Pausanias: Guide to Greece*, 2 vols., London, 1979 (1971); Pausanias, trans. by Jones W., *Pausanias: Description of Greece*, 5 vols., Harvard, 1918-1935; Casevitz

- M. et al. (eds.), *Pausanias: Description de la Grèce*, 6 vols., Paris, 1992-2005; パウサニ阿斯 (飯尾都人訳) 『ギリシア記』、龍溪書舎、1991年; パウサニ阿斯 (馬場恵二訳) 『ギリシア案内記』 (上下)、岩波書店、1991年。
- 10) Paus. III.11.1. パウサニ阿斯は「最も記憶に値する」という表現も用いている (Paus. II.34.11)。Habicht, *op. cit.*, p.22 の註 88-89 は、これら 2 つの表現が登場する箇所を網羅的に列挙している。また同時に、パウサニ阿斯には、まだ語られていないことや忘れられたことを語ろうとする意識もあった (Paus. I.6.1; I.27.3; X.17.13)。逆に言えば、既に語られたことを繰り返すことに彼は関心を持たなかった (Paus. II.30.4; III.17.7)。彼が同時代の著述家と比べ、ヘレニズム時代に多くの紙幅を割いている理由の一つは、ここにあるのだろう。Habicht, *op. cit.*, p.103, 134; Ameling, W., "Pausanias und die hellenistische Geschichte", in: Binjen, J. (ed.), *Pausanias Historien*, Genève, 1996, S.132-145; Swain, S., *Hellenism and Empire: Language, Classicism and Power in the Greek World, AD 50-250*, Oxford, 1996, p.332; Akujärvi, J., *Researcher, Traveller, Narrator: Studies in Pausanias' Periegesis*, Lund, 2005, p.233; Pretzler, *op. cit.*, p.9, note 38. cf. Bowie, E., "Past and Present in Pausanias", in: Binjen, J. (ed.), *op. cit.*, pp.211-213.
- 11) Pretzler, *op. cit.*, pp.6-7.
- 12) *Ibid.*, p.6, note 16. イオニアがギリシアの一部と表現される場合: Pau. VII.10.1; VIII.46.3. ギリシアの外部として表現される場合: Paus. VII.5.13, VIII.45.5. エペイロスに関して注目すべきは Paus. I.11.5-7 である。この箇所の第 6 節ではエペイロスはギリシアの外部の存在のように描かれているにもかかわらず、第 7 節ではギリシアの一員として描かれる。連続する箇所の間で、相矛盾するような表現がなされている理由は、それぞれの文脈にあると考えられる。前者では、エペイロスの王ピュロスが「ギリシア人の中で最初に攻撃の矛先を向けたのはケルキュラ人」だったと述べられるのに対して、後者ではエペイロスの王ピュロスが、ローマ人と戦った最初の「ギリシア」人だと述べられている。マケドニアについても同様で、通常は非ギリシア勢力として描かれるが (例えば Paus. I.8.3; VII.8.2)、対ローマという文脈を持つ、先述の Paus. I.11.7 では、エペイロスとならんで、ギリシアのうちに数えられている。
- 13) Richter, D. and Johnson, W. (eds.), *The Oxford Handbook of the Second Sophistic*, Oxford, 2017, p.6. 考古学の分野で、このような二分法を無批判に前提とすることを批判したものとして Whittaker, C., "Imperialism and Culture: The Roman Initiative", in: Mattingly, D. (ed.), *Dialogues in Roman Imperialism: Power, Discourse, and Discrepant Experience in the Roman Empire*, Portsmouth, 1997, esp. p.149, 156.
- 14) Habicht, *op. cit.*, pp.104-116.
- 15) 1985 年に出版されたパウサニ阿斯についてのモノグラフィーにおいて、Habicht は文学研究において軽視されてきた『案内記』を、その全体性において把握することの重要性を説いた。以後、ローマ期の文学一般に対する関心の増大も手伝って、パウサニ阿斯研究は爆発的な流行を示す。古典学と考古学における評価の分断を架橋し、『案内記』を文学作品として研究する方向性に先鞭をつけた点で、この Habicht の研究が 1 つの転換点になったことは動かしがたい。Habicht, *op. cit.*, Preface to the Paperback Edition, pp.xii-xiii; Alcock et al. (eds.), *op. cit.*, p.vii; Pretzler, *op. cit.*, p.13. しかし Habicht 以前においても、パウサニ阿斯に対する文学的関心が皆無であったわけではない。代表的なものとして以下の研究がある。Robert, C., *Pausanias als Schriftsteller, Studien und Beobachtungen*, Berlin, 1909; Bischoff, H., "Perieget", *RE*, Bd.19, 1938, S.725-742; Regenbogen, O., "Pausanias", *RE Suppl.*, Bd.8, München, 1956, S.1008-1097; Strid, O., *Über Sprache und Stil des Periegeten Pausanias*, Stockholm, 1976. また、ポール・ヴェーヌはギリシア人の神話や真実認識を論じる中で、パウサニ阿斯にも重要な位置づけを与えている。ポール・ヴェーヌ (大津真作訳) 『ギリシア人は神話を信じたか—世界を構成する想像力にかんする試論—』、法政大学出版局、1985 年 (原著 1983 年)。また近年では、Habicht を画期とする研究史の理解自体も見直されるようになってきている。Hutton, *op. cit.*, p.4 は、Habicht 以後の研究が細部に拘るあまり、全体との連関を見失い、「群盲象を評す」が如き状態に陥っていると指摘する。また、19 世紀末から 20 世紀前後の研究を再評価する動きもある。Fratesantonio, *op. cit.* 紙幅の関係上、ここでその詳細に立

- ち入ることはできないが、筆者も Habicht をあまりに重視した研究史の理解は相対化が必要だと考えている。この点については別の機会に論じたい。
- 16) Habicht, *op. cit.*, pp.104-105.
 - 17) *Ibid.*, pp.106-108 において挙げられている箇所は以下の通りである。Paus. I.25.3; III.10.5; IV.24.5; 28.2-3; V.4.7; 4.9; VII.6.3-7; 15.6; 18.6; VIII.6.1-3; IX.6.1-2; 6.5; X.2.1; 3.4; 20.5; 22.6.
 - 18) 馬場、前掲論文、83 頁：同『ギリシア案内記』（上）訳者解説、299 頁。
 - 19) 馬場、前掲論文、75 頁。
 - 20) Elsner, J., *Art and the Roman Viewer: The Transformation of Art from the Pagan World to Christianity*, Cambridge, 1995, esp. pp.136-137, 142-143.
 - 21) Alcock, S., "Landscapes of Memory and the Authority of Pausanias", in: Binjen, J. (ed.), *Pausanias Historien*, Genève, 1996, esp. p.258.
 - 22) Swain, *op. cit.*, pp.330-356, esp. pp.332-333.
 - 23) Ameling 自身は明確な定義づけを行っていないが、*OCD* によると「パンヘレニズム」は、"the idea that what the Greeks have in common as Greeks, and what distinguishes them from barbarians, is more important than what divides them." と定義される。*OCD*⁴ s.v. "panhellenism". 前後の文脈を考慮すると、Ameling も概ねこのような意味で、この言葉を使用しているように思われる。Ameling, *op. cit.*, S.142-143.
 - 24) Swain, *op. cit.*, p.334; Alcock, *op. cit.* (1996), pp.254-255; Ameling, *op. cit.*, S.142-143. なお、これらの見解の間には微妙な相違もある。Habicht は繁栄 (welfare) よりも、あくまで自由 (freedom) への貢献が評価の基準だったというのに対し、Swain はこれを繁栄と自由への貢献だとしている。他方、Alcock はペルシア戦争が評価の基軸だと言い、Ameling は「ギリシア全体」に対する貢献がそれだと述べている。とはいえ、これらのキーワードに厳密な定義が与えられているわけではなく、どれも概ね同じような意味で用いられているように思われる。それゆえ、本文中では 4 者の主張の中間をとったような表現を使用した。
 - 25) Alcock, *op. cit.* (2001), pp.152-153.
 - 26) こうした最近の研究動向については、さしあたり Richter and Johnson, *op. cit.* 所収の諸論文を参照。
 - 27) Hutton, *op. cit.*, pp.39-41; Pretzler, *op. cit.*, pp.29-30.
 - 28) Schmitz, T., *Bildung und Macht: Zur sozialen und politischen Funktion der zweiten Sophistik in der griechischen Welt der Kaiserzeit*, München, 1997, S.18-26; Frateantonio, *op. cit.*, S.50-51; 長谷川岳男「ギリシア「古典期」の創造 ―ローマ帝政期におけるギリシア人の歴史認識―」『西洋史研究』32、2003 年、24-55 頁。「ソフィスト」が出身都市及び帝国全体において果たした役割については、Hutton, *op. cit.*, pp.33-34.
 - 29) Habicht, *op. cit.*, pp.23, 102-105, 130-137; Akujärvi, *op. cit.*, p.186. 本稿の註 10 も合わせて参照。
 - 30) Hutton, *op. cit.*, pp.32-35; Pretzler, *op. cit.*, pp.25-26.
 - 31) Akujärvi, *op. cit.*, pp.12-13.
 - 32) *Ibid.*, pp.13-16, 206-306.
 - 33) *Ibid.*, pp.232-295.
 - 34) *Ibid.*, pp.264, 305-306.
 - 35) *Ibid.*, pp.206-231.
 - 36) Frateantonio, *op. cit.*, S.37-51.
 - 37) *Ibid.*, v. a. S.56.
 - 38) Paus. VIII.49.1.
 - 39) Paus. VIII.49.2-51.8.
 - 40) 以下の引用において () 内のアラビア数字は作品内の節番号。[] は、意味を取りやすくするための訳者の補足である。
 - 41) 当然ながら、このパウサニアスは『案内記』の著者とは別人で、プラタイアにおいてギリシア軍を指揮したスパルタ人のパウサニアスである。

- 42) 人名が複数登場する場合など、記述が煩瑣になる場合は、番号での表記のみで済ませる場合もある。
- 43) 人名の後の（ ）内の節番号は「善行者リスト」内での言及箇所。なお、③、④、⑤、⑥、については、彼らを直接的に善行者と呼んでいる記述はない。けれども文脈上、彼らが善行者に含まれることは明らかである。すなわち、第1節で、善行者の系譜の始点（①）と終点（②）が定められ、さらに前者のペルシア戦争における功績を通じて、「ギリシア全体に対する貢献」の範例が提示される。これによって善行者リストの、いわば外延と内包を明確化したうえで、パウサニ阿斯は系譜の叙述に入ろうとしているのである。その後、第2節及び第3節の前半で扱われる者たち（③、④、④、⑤、⑤、⑥）が、全員ペルシア戦争の功労者であるのは、明らかにミルティアデスに続く善行者の系譜を叙述せんがためである。「善行者」の語が登場するのが、敢えてこの称号を否定する場合のみ（④、⑤）であるということが、何よりもその証左である。つまり、ペルシア戦争の英雄＝「ギリシア全体にとっての善行者」であるからこそ、この戦争の功労者であるにもかかわらず「ギリシア全体の善行者」でないという「例外」が、特に説明を要する事項となっているのである。また、コノン（⑦）とエバミノンダス（⑧）も直接には善行者と呼ばれていないが、「ギリシアの人々を立ち直らせた」（τὸ Ἑλληνικὸν...ἀνεκτίσας）という記述からして、彼らが善行者に含まれることは確実であろう。また⑥は、善行者たる資格を直接的に否定されているわけではないが、「身内殺し」（αὐτόχειρας）という激しい非難の言葉からして、この者たちが善行者の対極に位置づけられていることは、文脈上明らかである。
- 44) 代表的なものとして Regenbogen, *op. cit.*, S.1066-1069.
- 45) Ameling, *op. cit.*, S.124.
- 46) λόγοι と θεωρήματα という区分は、パウサニ阿斯自身が使っている表現に由来する：Paus. I.39.3.
- 47) λόγοι と θεωρήματα を融合させるという手法の背景として、Hutton, *op. cit.*, p.49 は「エクフラシス」（ἐκφρασις）との関連を指摘している。
- 48) Paus. IV.1.1-29.13. 第4巻の詳細については、Alcock, *op. cit.* (2001).
- 49) キモンについては本稿の註66、アラトスについては註68を参照。
- 50) Habicht, *op. cit.*, pp.113-116.
- 51) Swain, *op. cit.*, pp.334-335.
- 52) Ameling, *op. cit.*, S.142-143.
- 53) Akujärvi, *op. cit.*, pp.220-222.
- 54) Habicht, *op. cit.*, pp.114-115. 第9巻でパウサニ阿斯はレウクトラの勝利を賞讃している。Paus. IX.6.4.
- 55) Akujärvi, *op. cit.*, pp.220-222.
- 56) Ameling, *op. cit.*, S.142-143. なお、パウサニ阿斯の親アテナイ的傾向は、S.137, note 94, S.147-148 でも指摘されている。彼の見解では、『案内記』の第1巻がアッティカ地方の叙述に捧げられていることが、既に親アテナイ的立場の表れである。
- 57) Swain, *op. cit.*, p.335.
- 58) Ameling, *op. cit.*, S.142-143; Swain, *op. cit.*, p.335.
- 59) de Ste Croix, G., *The Origins of the Peloponnesian War*, London, 1972, pp.294-295.
- 60) Diod. Sic. XII.37.2. 本文中の訳は筆者自身によるものである。訳出に際しては、K. Fischer と F. Vogel によるトイブナー版（1888-1906）を底本とし、ロウブ古典文庫版の C. Oldfather 他訳（1933-1967）を参照した。
- 61) Diod. Sic. XII.38.1-41.1.
- 62) Diod. Sic. XII. 38.1.
- 63) もう1つの箇所は Paus. IV.6.1.
- 64) Paus. III.7.11. なおここで開戦の原因とされているステネライダスについて、トュキュディデスは少し異なる位置づけを与えている。Thuc. I.85-87. 両者の記述の差異については Frateantonio, *op. cit.*, S.241, note 304 を参照。
- 65) 善行者のうちアテナイ人である者：①、④、⑤、⑥、⑦、⑨；アカイア同盟の者：②、⑩；ス

- パルタ人：③；テバイ人：⑧
- 66) キモン（⑥）の功績については Paus. I. 29. 14; VIII. 8. 9. 両箇所によれば、キモンの功績というのは、前 476/5 年におけるエイオン攻囲戦でのペルシア太守に対する勝利、および前 466 年における「エウリュメドン川の戦い」でのペルシア勢に対する勝利である。
- 67) レオステネス（⑨）は、傭兵救出の事績のゆえに善行者とされていた。この出来事については第 1 巻により詳細な記述がある。Paus. I.25.5. また、「恩人リスト」では言及されていないものの、レオステネスは、ラミア戦争（前 323-322 年）で全ギリシアの連合軍を率いてマケドニアと戦った将軍でもあった（Paus. I.1.3; 25.5; 29.13; III.6.1）。
- 68) アラトス（⑩）に関しては、「シキュオンについての巻」を参照するようにとだけ述べられている（Paus. VIII.52.5）。その記述とは II.8.1- 9.5 である。ここでのアラトスの功績をまとめると、シキュオンとアルゴスの僭主を追放したこと、マケドニアと戦いギリシア諸市を解放したこと、及びスパルタの僭主であるアギスとクレオメネスを追放したことの 3 点が挙げられる。対マケドニアと対スパルタの両方に彼を分類したのはそのためである。あるいはアラトスを僭主と戦った善行者と呼ぶことも可能かもしれない。
- 69) なおパウサニアスは、クレオメネスの僭主政時代にスパルタが他都市に与えた苦しみに関して、それは僭主政ゆえに生じたことであるので、スパルタの民衆にその責任はないと述べている。Paus. VIII.27.16. パウサニアスの僭主嫌いについては、Habicht, *op. cit.*, pp.110-111 を参照。
- 70) ピロポイメン（②）に関して、プルタルコスに依拠している可能性が指摘されている記述というのは Paus. VIII.49.1-51.8. Regenbogen, *op. cit.*, S.1075-1076; Raeymaekers, J., “The Origins of the Rivalry between Philopoemen and Flamininus”, *Anc. Soc.* 27 (1996), pp.273-276; Swain *op. cit.*, p.335; Akujärvi, *op. cit.*, p.199, note 82. アラトス（⑩）に関しては、Regenbogen, *op. cit.*, S.1072, 1075 を参照。
- 71) Hitzig und Blümner, *op. cit.*, Bd.1, S.528-529.
- 72) かつてこうした傾向のあったことを指摘しているものとしては、以下を参照：Frataantonio, *op. cit.*, S.69-70; Alcock, *op. cit.* (2001), pp.142-143.
- 73) なお、プルタルコスを比較対象とするのは、あくまで註 70 で述べた事情のためであって、プルタルコスの記述が当時の一般的な見解と合致すると考えるからではない。例えば、プルタルコスの「ボイオティアびいき」はよく指摘される彼の特徴であるが、これが同時代人の多くに共有される立場だったとは到底言えないだろう。プルタルコスのボイオティアに対する肩入れについては、Habicht, *op. cit.*, p.111.
- 74) Plut. *Agis/Cleom.* 37.3. 本稿でのプルタルコスからの引用は、全て筆者自身の訳による。底本としたのは K. Ziegler によるトイブナー版（1969-1980）で、章及び節の区切りもこれに従った。訳出に際しては、ロウプ古典文庫版の B. Perrin 訳（1914-1926）、河野與一訳『プルターク 英雄伝』（1952-1956）、柳沼重剛、城江良和訳『英雄伝』（2007-）を参照した。
- 75) Plut. *Arat.* 38.7.
- 76) Paus. II.9.2.
- 77) 興味深いのは、パウサニアスと同様の見解がポリュビオスにも確認できるということである。アラトスはじめアカイア同盟の面々がアンティゴノスに救援を求めるに至った経緯に関して、彼もまたパウサニアスと同じく、「余儀なくした」（ἡνάγκη）という表現を用いているのである。Polyb. II.51.4 (Th. Büttner-Wobst によるトイブナー版のテキスト（1889-1905）を参照）これがパウサニアスの書きぶりに影響している可能性は、十分考えられるだろう：Hitzig et Blümner, *op. cit.*, Bd.1, S.529. ポリュビオス、プルタルコスのパウサニアスへの影響に関しては複雑な議論があり、ここでその詳細に立ち入ることはできないが、先にも述べた通り、決定的に重要なのは、パウサニアスの見解が何に依拠するにせよ、それが主体的な取捨選択の産物だと考えられるという点である。
- 78) Swain, *op. cit.*, pp.334-336.
- 79) Paus. VIII.52.6.
- 80) Plut. *Phil.* 1.7.

- 81) Plut. *Flam.* 22.1-2.
- 82) Plut. *Cim.* 19.3. ペルシア戦争の史料としてのヘロドトスに対する、パウサニ阿斯とプルタルコスの見解の相違については、Akujärvi, *op. cit.*, pp.245-247 を参照。
- 83) Paus. III.9.2.
- 84) Paus. I.3.2; VI.7.6. Akujärvi, *op. cit.*, pp.224-226 も参照。
- 85) Frateantonio, *op. cit.*, S.232-233.
- 86) Frateantonio, *op. cit.*, S.65-69, 230-258.
- 87) 1 つだけ例を挙げるとするなら Paus. III.16.7-10 の解釈である。Frateantonio, *op. cit.*, S.65-59, 245, 255 によると、この箇所ではアルテミス像にまつわる暴力や狂気についてパウサニ阿斯が縷縷述べているのは、スパルタ人に暴力性と狂気という属性を付与するためだという。しかしここで、パウサニ阿斯が暴力沙汰や狂気に言及しているのは、このアルテミス像が「バルバロイのもとから」来たものであることを示すためである (Paus. III.16.9)。それにもかかわらず、この記述をスパルタ人の内在的な暴力性と結びつけるのは、説得性を欠く解釈である。
- 88) *Ibid.*, S.237. 第 3 巻中で賄賂に関する記述 : Paus. III.4.3-6; III.7.9.
- 89) 「」は訳者による補い。さしあたり「大溝」と訳しておいたが、原語は Μεγάλη τάφρος である。
- 90) 「」は訳者による補い。
- 91) Paus. IV.17.2-5.
- 92) Paus. VII.10.1.
- 93) この対照性には Habicht も言及している。Habicht, *op. cit.*, p.114.
- 94) Paus. IV.17.3.
- 95) Ameling, *op. cit.*, S.143 は同じ記述 (Paus. IV.17.4ff.) を根拠に、スパルタ人は、買収と裏切りによってギリシアの統一を乱した最初の者であったと述べている。
- 96) Paus. VII.10.5.
- 97) Paus. VII.17.1-2.
- 98) Paus. VII.6.8-7.1.
- 99) Paus. VII. 7.1-17.4.
- 100) Paus. VII.10.3.
- 101) Paus. VII.17.2. VII.6.8 も参照。
- 102) Ameling, *op. cit.*, S.142 は、エパミノンダスに関するこの矛盾を指摘してはいるものの、掘り下げて論じることはしていない。
- 103) Hutton, *op. cit.*, p.47; Frateantonio, *op. cit.*, S.41.
- 104) Ameling, *op. cit.*, S.141, Anmerkung 116 はパウサニ阿斯と同時代の著作のうち、ペロポネソス戦争をギリシア衰退の原因とする見解を共有しているものを列挙している。
- 105) Paus. VIII.27.10. Akujärvi, *op. cit.*, p.248.
- 106) Paus. VII.7.7-17.4.

《English Summary》

How Pausanias Views Greece

A Reinterpretation from the Local Dimension

Fuki ONO

With the aim of depicting everything pertaining to Greece, Pausanias' *Περιήγησις* is a work incomparable both in its geographical scope and in the density with which each region is described. In order to grasp the core of this complex literary construct, many attempts have been made to understand Pausanias' views on Greece, past and present.

Until recently, however, the prevalent interest on the issues of Roman imperialism has too often led to an overemphasis of Greek vs. non-Greek (particularly Roman) conflicts, which, on the other hand, has caused the relative neglect of the local dimension of Pausanias' Greece. That is to say, the poleis and regional entities which collectively constitute Greece have not been paid the attention they justly deserve in the attempts to interpret Pausanias' views on Greece.

This paper, therefore, focuses on the often-neglected local dimension, and uses this as a key to understanding the way Pausanias conceptualized the history of Greece. His consistent 'anti-Spartan' attitude, it will be argued, enables two different concepts of 'Greece' to co-exist in *Περιήγησις* - one against non-Greeks such as Persians, Macedonians, and Romans, the other against Sparta. This duplicity of 'Greece', it turns out, functions as a joint through which to integrate the decline narrative of Greece, full of inter-Greek wars, into the idealized vision of the classical period symbolized in the victory against the Persians. Finally, suggestions are made to newly contextualize the work in the culture of the Roman Empire of the 2nd century, without turning back to the well-worn dichotomy of Greek vs. non-Greek.